
とある科学と風紀の特異体質

ニシシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学と風紀の特異体質

【Nコード】

N1330R

【作者名】

ニシシ

【あらすじ】

東城時人は学園都市の風紀委員<ジャッジメント>第一七七支部に所属する高校一年である。表向きは無能力者であるが過去の能力実験の後遺症で特異体質になった。そんな彼と禁書目録と超電磁砲の登場人物が織り成す物語です。ヒロインとしては佐天さんでいうとおもいます。基本は禁書目録と超電磁砲のアニメ沿いにオリジナルを混ぜていきます。

読み手の好みがあると思いますが、気に入ってもらえたら感想やア

ドバイスいただけたらと思います。

第0話　主人公紹介（前書き）

はじめまして。本小説を読んで頂きありがとうございます。
本編の前に主人公の紹介をします。

第0話／主人公紹介

東城 時人（とうじょう ときと）

概要 本小説の主人公。基本的に「主人公にならない主人公」美味しいところは大体当麻や御坂達に持っていかれる。当麻と同じ高校のクラスメイトであり寮も同じである。土御門や青髪とも一緒にいることが多い。補習組の一員だが風紀委員のため免除されている。性格はお人好しで世話好きであり、滅多な事では怒らない。料理や家事、戦闘や情報処理、はては雑務なども幅広くこなす万能スキルをもつ。不良程度なら軽くあしらえる。中学になってから風紀委員になったが、今の支部に移ったのはごく最近である。黒子や初春、固法とはある程度見知っているが、本編開始直後は佐天や御坂とはまだ知り合っていない。戦闘では後述の能力（体質？）と体術と常に持ち歩いている刀で行う。身長は167cmと同年代の男の中では低め。

キャラクターイメージは夜桜四重奏の比泉 秋名のお役目モードです。（知らない方はネットで検索してみてください）

過去 とある実験施設で生まれた試験管ベイビーの為、親はいない。その施設もある事件により崩壊し時人のみが生き残った。その際に特異体質になる。その後病院で小萌に出会い引き取られる。なので小萌には頭が上がらない。家事スキルもこの時取得。中学のときに風紀委員に志願し、高校に入学の際に教師と生徒と一緒に暮らしているのはまずいと学生寮へ移る。この時当麻や土御門と知り合う。常に持ち歩いている刀もその施設から発見された形見の様な物である。しかしこの刀にはある秘密がある・・・

能力 表向きは無能力者。 任意で発動しない限り構造は普通の学

生とさほど変わらない為能力査定を受けてもなにも反応しない。

特異体質 実験の後遺症で発祥した力。任意による感覚や運動力、傷の治癒力が爆発的に上がる。素手でコンクリートを砕く、かすり傷程度なら一瞬で完治する。至近距離でも銃弾を避ける等。しかし身体にかかる負担が大きく長時間の使用や連続の使用をすると逆に身体にすべてかえってくる。使用中は左目が青くなる。使用後はしばらく左目は見えなくなり、使いすぎると目から血が流れる。

武器 刀 名を時雨鐔しぐれも鞘も真っ白の刀。あと逆刃である。イメージはゾロの和道一文字。時人がいた施設で見された刀。何故その施設にあったのか誰の所有物なのか不明の為（現段階では）唯一の生き残りの時人に渡された。能力を斬る事が出来る。幻想殺しの刀版。能力者が触れると能力が使えなくなる。普通に刀としても扱えるが時人は大体が峰打ちで使用している。いくらジャッジメントといえ銃刀法違反になる為普段は専用のシオルダーケースに入れ持ち歩いている。時人が使うのは主に抜刀術の様なものだが我流である。また人体を攻撃するときは大体が峰打ちである。

第1話〜出会い〜（前書き）

いよいよ本編開始です。今回はタイトル通り主人公と佐天の出会いです。

感想やアドバイスあればお待ちしております。

第1話　出会い

ある日もつ日付が変わろうとしている時間に少年は自宅へと急いでいた。少年、東城とうじょう 時人ときとは学園都市の治安を維持するための組織風ジャック紀委員ジメンに所属している高一である。今日は風紀委員の仕事で遅くまで支部に残っていた為である。

東城「やばい。やばい。まさかここまで時間かかるとは思わなかったよ。当麻には悪い事したな。」

当麻とは彼の住んでいる学生寮のお隣さんであり、高校のクラスメイトである親友である。今日は当麻と当麻の部屋に居候しているインデックスに晩御飯を振舞うつもりだったのができなかった。当麻には電話で話したがその後ろでインデックスが騒いでいたのが聞こえた。かなり楽しみにしていたのだろう。

東城「近いうちに埋め合わせしなきゃいかな〜。ん？」

不意に声が聞こえたような気がした。あたりを見たが特に誰も見当たらなかった。こんな時間に人がいるはずがない。ましてやこの道は普段はあまり使わない道であり不良のたまり場にもなっている場所だ。東城は立ち止まり短く息をはいた。

東城「ふう。感知エリア拡大。．．．．．見つけた。これは．．．悲鳴？」

わずかに聞き取った声は悲鳴だった。東城は急いでその場所に向かった。

そこにはいかにも不良な男が少女を壁際へ追い詰めていた。男の右手には炎が揺らめいていた。おそらく能力者だろう。その奥で少女がその場に座り込んでいた。逃げろと言っても間に合いそうにない。東城はそう判断し、まずは少女をあの炎から守らなければ、

東城「解放。脚力レベルを3まで上げる。」

そう呟くと東城は一気に加速し、男と少女の間に割り込んだ。男は驚いた顔をしていた。

男「なっ誰だお前、いつの間に？」

東城「風紀委員だよ。あんた、こんなところで何やってんですか？」

東城は風紀委員の腕章を指した。男は少し驚いたがニヤリと笑い右手に炎を構えた。

男「ハハハッ。丁度いいや。風紀委員にはいつも邪魔されていたかな。見たところ一人みたいだし、二人まとめて焼いてやるよ。」

男は炎を投げようとしたがそこには東城の姿はなかった。そして腹に衝撃がはしり、その場に膝をついた。

東城「ふう。遅いね。隙だらけだよ。」

東城は脚力強化で間合いを詰め、男の腹に肘打ちをしていた。男はそのまま気絶した。

東城「まったく。能力に頼りすぎだよ。さて支部に連絡するか。と

その前に」

東城は先程から震えている少女へと歩み寄った。「大丈夫かい？」と声はかけてみるがまだ助かった事に実感がないのか未だに震えていた。あらためて少女を見るといくら暖かい季節とはいえこの時間は冷える。なのに少女は薄手のワンピースのみだった。東城は自分の上着を少女にかけてあげた。すると、少女は顔あげて東城を見た。瞳には涙をためていた。東城はあらためて「もう大丈夫だよ。」声をかけると、少女は東城の胸に飛び込んで泣き始めた。東城は少女の頭をポンポンと撫でた。

少女「すみません。なんか取り乱しちゃってしまつて……」

少女は恥ずかしいのか俯きながらいった。あれから連絡した支部の人に男を引き渡した。少女は東城が送っていく事になり、今は少女が落ち着くのを待っているところだった。

東城「気にする事ないよ。あつ俺は東城。東城 時人だ。見ての通り風紀委員だ。ちなみに高一。君は？」

少女「佐天。佐天 涙子です。柵川中学の一年です。」

東城「佐天か。よし佐天、家まで送るよ。場所教えてくる？」

「お願いします。」と佐天は答え携帯を取り出したが、そこで佐天の動きが固まった。

東城「ん？どうかした？」

佐天「もっ門限すぎてる。」

東城「……マジで？」

佐天「どうしよう。初春はもう寝てるだろうし、あまり手持ち持ってないし、どうしよう。」

慌てる佐天を見て、東城もどうしようかと考えなんとなくの案を言ってみた。

東城「ん……なあ。良かったら、俺の家行く？」

佐天「えっ！？でも、そんな、悪いですよ。助けてもらったのにそこまでしてもらうのは」

東城「手持ち少ないんだろ？それに女の子一人放っておくのも心配だしさ。もちろん佐天がよければだけど、どうかな？」

佐天は思った。確かにそのほうがいいかもしれない。風紀委員だし助けてくれた。何よりすごく優しくそうな人だと思った。正直あんな思いをして一人で居たくないと思った。

佐天「じゃあ。お言葉に甘えて。お願いしてもいいですか？」

東城「よし。決まりだな。じゃあ、外は冷えるし行きますか。」

と東城が歩きだすとクイツと何かに引っ張られた。「ん？」と思い見ると佐天が申し訳なさそうにシャツの端をつかんでいた。

東城（そうだよな）まだ中学生だし、そんなにすぐには立ちなおれ

ないよな〜)

東城は敢えてなにも言わずに佐天の歩く速さにあわせるように歩いた。そして二人は東城の家へと向かった……。これが二人の最初の出会いだった。

第2話〜お泊り〜（前書き）

第2話です。

東城に助けられた佐天は東城の家に泊まる事になった。

感想・アドバイスお待ちしております。

第2話　お泊り

東城「一人暮らしで狭いけど遠慮しないで寛いでね。」

佐天「おっお邪魔します。」

東城は佐天をリビングへ通した。佐天はリビングを見渡した。男の人の部屋なのにスッキリとしており部屋の真ん中のテーブルに多少雑誌や本が置いてあったが、きちんと整頓されていた。

佐天「結構きれいにしてるんですね。男の人の一人暮らしだから散らかっているんだと思ってたんですけど。」

東城「まあ。掃除とかは結構好きだからね。あつ佐天、シャワー浴びておいでよ。身体冷えてるだろ？タオルと着れそうな物用意したから。」

ゴソゴソとクローゼットを漁りそして東城は佐天にタオルと着替えを渡した。

佐天「わっ悪いですよ。東城さん先にはいつてください。」

東城「遠慮しなくていいよ。俺は後でいいからさ。薄着で長い時間外にいたから冷えただろ？早く温まっておいでよ。」

佐天「すみません。じゃあ、お言葉に甘えて・・・お借りしますね。」

佐天は東城からタオルと着替えを受け取るとバスルームへと向かった。

東城「さてと、そういや晩御飯まだだったな。今日は簡単にチャーハンにするかな。あつ佐天も食べるかな？」

そんなことを呟きつつ東城はキッチンへ向かい準備を始めた。

暫くして佐天がバスルームから出てきた。

佐天「シャワー、ありがとうございます。」

東城「少しは温まったかい？ん。やっぱり少し大きかったかな？」

東城が佐天に渡した着替えは東城のシャツとズボンだったが、佐天には大きすぎたようでシャツの端は佐天の膝上くらいまであった。ズボンにいたっては履けなかったようだ。湯上りで少し上気した佐天に東城は少しドキツとした。

佐天「そうですね。やっぱり少し大きかったです。ズボンは丈が合わないんでお返しします。」

東城「あつああ。そうだね。」（やばい。今更だがこれは結構ヤバイ状況ではないか？）

東城は佐天からズボンを受け取る。その時に身長差から少し上目遣いだしシャツの隙間から僅かに胸元が見えた為、またもやドキツと思わず佐天から目を逸らした。佐天は？という顔をしていたが、次の瞬間「グウ」と可愛らしい音がした。佐天は恥ずかしくなったのは俯いた。それで東城は可笑しくなり、

東城「ははは。丁度晩御飯出来たからさ、食べるだろ？」

佐天はコクンと頷いた。

東城・佐天「頂きます。」

二人は東城の作ったチャーハンを食べていた。

東城「余りもので作ったやつなんだけど、どうかな？」

佐天「普通に美味しいですよ。料理も上手いんですね。」

東城「まあね。前に一緒に住んでいた人があまりにも家事が出来なかったからさ。」

東城はため息をついた。「苦労人なんですね。」と佐天はかえした。それから二人は他愛無い話をし、その時に佐天が「アドレス交換してください。」と言ったのでアドレスを交換した。そんなこんなで時間はもう日付が変わって2時間が過ぎていた。明日は土曜で休みだが、佐天を送らないといけないし、風紀委員の仕事もあるため、寝ることにした。東城はテーブルを片付けそこにお客用の布団を敷いた。

東城「佐天はベット使いなよ。俺が床で寝るからさ。」

佐天「いや、私が床でいいですよ。東城さんがベット使ってください。」

暫く譲り合いをしていたが結局、佐天がベッド、東城が床ということになった。東城が電気を消して二人は布団に入った。東城が目を

閉じようとした時佐天が手を伸ばしてきて、

佐天「あの、寝付くまででいいんで握っててもらっていいですか？
実はまだ少し怖くて・・・」

暗くてよく表情は見えなかったが東城は、佐天の行動を可愛く思い、
佐天の手を握った。

東城「大丈夫だよ。寝るまで繋いでるし、佐天が寝るまで起きてる
から安心していいよ。」

佐天「ありがとうございます。東城さん。」

こうしての出会いの一日が終わった。翌日、東城は佐天を寮へ送り
届けた。寮監には事前に事情を電話で説明しておいたので佐天に罰
がでることはなかった。別れ際に佐天が「今度お礼しますね。あと、
暇な時は連絡ください」と笑顔で言った。東城も「分かったよ」と
言って二人は別れた。そおして、親友の当麻とインデックスに朝食
を用意する為に東城は自宅へと急いだ。

第3話〜レベル5〜（前書き）

第3話です。今回は超電磁砲のアニメ第1話の時間軸です。

第3話〜レベル5〜

佐天との出会いから数日が過ぎ、東城はいつも通りの日々を過ごしていた。佐天ともメールでのやり取りをしていた。今日は補習もなくすぐに支部に顔を出すことにした。

東城「じゃあな、当麻、土御門、青髪。」

上条「おう。時人。頑張れよ。」

土御門「またな。時やん。」

青髪「頑張つてゝな。」

上条たちと別れてからそのまま支部へと向かった。

東城「お疲れ様です。」

固法「あら、お疲れ様。今日は早いね。」

支部の扉を開け挨拶をすると、女性が挨拶を返してきた。固法 美偉くこのり みい>は同じ支部の所属であり、先輩にあたる。能力者であり経験も豊富な為、この支部のリーダー的存在だ。東城をこの支部に引き抜いたのも実は彼女である。

東城「固法先輩。今日は一人ですか？」

固法「ええ。今日は白井さんと初春さんは非番だし、他の人はみんな出払っているから事務所は私と貴方だけよ。」

と固法は端末に向かい書類を整理し始めた。東城は魔法瓶にお湯を入れコーヒーの準備をした。

東城「じゃあ。半分は俺がしますよ。書類回してください。」

固法「ありがとう。そうしてもらえると助かるわ。」

そして二人で書類を整理して、終わりに差し掛かったころ固法に連絡が入った。

固法「もしもし、初春さん？・・・そう。状況は？・・・分かったわ。今東城君を向かわせるわ。」

どうやら何かあったらしい。固法と初春のやり取りで大体の状況は把握した東城はすぐに準備した。

固法「一緒に白井さんもいるから、問題はないと思うけど、一般人もいるから念の為よろしくね。」

東城「了解。じゃあ。行ってきます。」

東城が現場に到着したとき、既に事件は粗方片付いていた。どうやら銀行強盗だったようだ。しかし犯人グループは既に取り押さえられていた。取り押さえていたのは、ツインテールの常盤台の制服を着た少女だった。少女の右肩には東城と同じ風紀委員の腕章がついていた。

東城「さすが白井だな。まあレベル4だしな。大抵の能力者なら敵わないしな。」

東城はこれは自分が手伝うことはないなと思い、その場を立ち去ろうとしたが、その時、犯人の一人が子供を人質にしようとしていてそれを少女が必死に止めていた。その少女は佐天だった。男は人質が取れないことを知ると佐天を突き飛ばし、近くの人に乗り込んだ。どうやら轢殺そうとしているようだ。東城は能力を解放しようとした。その時、

御坂「黒子。ここからは私の喧嘩だから、手、出させてもらっわよ。」

東城「誰だ？」

一人の少女が犯人の車の前に歩み寄った。白井と同じ常盤台の制服で見た感じ白井より少し年上っぽかった。犯人はアクセルを吹かした。少女は臆することなくポケットからコインを取り出し指ではじいた。すると、コインはレーザーのごとく犯人の車を吹き飛ばした。犯人グループと俺は啞然としていた。

白井「これが、常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫。御坂 美琴 お姉さまですの。」

犯人・東城「す、すげえ。」

東城「これが、学園都市に8人しかいないレベル5の第三位か。とんでもないな。」

だが、御坂の吹き飛ばした車の部品が佐天へ飛んできていた。それ

に気づいた東城は脚力を強化して佐天を抱えて部品から避けた。その反動で二人は勢いよく草むらに突っ込んだ。

佐天「いったあ。何がおき、って東城さん？」

東城「よお。佐天。危なかったね。怪我はないかい？」

佐天「ありがとうございます……!!」

東城「ん？どうした？つとほつた傷があるぞ。ちょっと待てる。確か絆創膏あったはずだから。」

東城はポシエットから消毒液と絆創膏を取り出し、手当てをはじめた。佐天は東城の顔が近いので恥ずかしくなり、されるがままに固まっていた。暫くして、手当てが終わったとき、佐天を呼ぶ声があった。

初春「佐天さん」

佐天「あっ初春だ。」

初春「佐天さん。大丈夫ですか？あっ東城先輩じゃないですか。」

東城「おう。初春。あら二人は知り合いだったのか。そいや同じ制服だわな」

佐天「はい。初春はクラスメイトですが……っは」

佐天はいまだに東城に抱えられている状態に恥ずかしくなり、さつと東城から離れた。

初春「そういう佐天さんこそ東城先輩と知り合いだったのですか？」

東城「まあ 偶然助けた時に知り合っただけ。しかし・・・すごい彼女ね」

東城はこちらに気づいて向かってくる御坂と白井を見ながら言った。

東城「学園都市に7人しかいないレベル5・・・その第3位超電磁砲
レールガン
か・・・」

初春「はい。私も今日知り合っただけなんですけど、すごいですね」

と御坂と白井が到着した。

白井「初春。負傷者ですの？・・・って東城さんではないですか。」

東城「よう。白井。相変わらずお見事な解決だったな。」

白井「いえ。最後はお姉様がかたづけましたので・・・」

と白井は御坂に抱きつくこうとしていた。それを拳骨で防いだ。白井はその場に倒れこんだ。

御坂「たつくこの変態は・・・っとアンタは？なんか黒子の知り合
いみたいね」

東城「俺は東城だ。白井と同じ支部のジャッジメントだよ」

御坂「へえ」。黒子の先輩か。私は御坂　美琴よ。よろしくね。」

東城「こちらこそ。噂はよく聞いているよ・・・白井からな」

そして事件も解決し支部に報告に行くことにした。その時佐天が東城にお礼をいった。心なしか顔が赤かったので東城は熱でもあるのかと佐天の額に手をあてるとさらに真っ赤になってしまったらしい。

第4話『ゲラヴィトン』(前書き)

お待たせしました。 かなり久々の更新です。

第4話　グラヴィトン

夏休みのある日　時人は公園のベンチで佐天を待っていた。

数日前に佐天からメールが来て「買い物に付き合ってください」と頼まれたのだ。その日は非番で補修もなく何もする事がなかったのだ、たまにはいいかとオツケイして今日にいたる。

時人「おつ　そろそろ時間かな？」

と時計を確認したと同時に入り口の方から佐天がかけてきた。急いできたのか肩で息をしてた。

佐天「はあ。はあ。すみません。少し準備に時間がかっちゃって。おまたせしました。」

時人「いやいや。時間通りだよ。ほいこれでも飲んで一息つきなよ。」

と先ほど自販機で買ったスポーツドリンクを佐天に手渡した。佐天はそれを受け取り飲み干す。っとそこで佐天はある事に気づいた。

佐天「あれ？これって時人さんの飲みかけじゃ・・・これってかつ間接キス！！！！」

時人「ん？どうした。佐天。顔赤いが？」

佐天「いい、いいえ。何でもありません。（気づいてない・・・鈍い）
そ、それより速く行きましょう」

佐天は時人の手を引っ張りながら公園をでた。

時人「ほほ　これがセブンスミストか　でかいな。」

佐天「はい。ここは学園都市で一番大きいデパートですからね。
大抵の物は揃いますよ」

時人「で　今日は何を買いにきたんだ？」

佐天「よくぞ　聞いてくれました。流行の夏物が出たんで見に来たんですよ」

と佐天は目を輝かせながらグツと拳を握りしめた。時人は（女の子はやっぱ買い物が好きなのかね？）と佐天の様子を見ながらそう思った。

それからしばらく二人は店を見て回った。最初は佐天の選んだ服の感想などを聞かれていたが途中から佐天が「時人さんもっと私服持ちましようよ。」ということになり今は佐天の着せ替え人形になっていた。

時人「なあ　佐天これ何時まで続くの？」

佐天「ん　時人さん容姿はいけるんですからもっとお洒落すればいいのに」

時人「服なんて制服と部屋着と仕事着あれば事足りるんだが・・・
」

と時人は反論しようとするのだがいかんせん佐天はかなりマジにな

つてきていて口を挟めないでいた。とそんな時向かいのカートのほうに見知った人物を見つけた。

時人「あれ？当麻じゃないか？なやってんだ？」

当麻「よー。時人。お前こそかいも・・・じゃないな。デートか？」

時人「んなわけあるか。付き添いだよ。付き添い。」

御坂「ちよつと。あんた。私にこの子押し付けて自分は買い物ですか？」

とそこへ御坂が女の子を連れてかけてきた。なんか無意識に静電気が出てるのは気のせいだろうか？そしてあーだこーだと当麻に文句を言っているときだった。時人の携帯がなった。表示をみると支部からだった。

固法「時人君、緊急事態よ。そのデパートに例のグラヴィトン事件の犯人が潜伏してるって情報がはいつたわ。」

時人「なんですって？ 本当ですか？固法先輩。」

グラヴィトン事件・・・ここ最近多発している事件で最初は小規模の爆発でいたずらだと思われていたが連続発生とその爆発の規模の拡大によってついに負傷者が出たため調査をしていたのだ。が未だに解決の糸口は見つかっていないままだった。

固法「そうなの。しかも犯人の狙いはジャッジメントなのよ。今初春さんが民間人の誘導してるんだけど、加勢して貴方達もはやく避難しなさい。白井さんも向かってるわ。」

時人「了解。となると、犯人は初春さんをまず狙うな・・・まずは初春さんと合流だな。」

当麻「どうした？ 時人？事件か？なんかアナウンスもなってるが・・・」

佐天「・・・」

時人「ああ。そのようだな。とにかく当麻。佐天達を避難させてくれないか？俺は初春さんと合流する。」

当麻「わかった。気をつけろよ」

佐天「時人さん・・・」

時人「悪いな。折角の買い物なのにさ。終わったらね。」

佐天「いえ。気をつけてくださいね」

当麻が三人を連れて避難したのを確認した時人はジャッジメントの腕章をつけ走り出した。

時人「初春さん。状況は？」

初春「あつ時人さん。はい一般人の避難は済みました。あとは犯人を待つだけです。」

とその時女の子が何か抱えて走ってきた。

時人「あれ？あの子はさっき当麻と避難したはずじゃ……はぐれたのか？」

当麻「おゝい。時人。さっきの子見なかったか？」

御坂「ちよつと。待ちなさいってば」

丁度 当麻と御坂がかえってきた。さっき避難してたはずだがあの子を探しにきたんだろう。二人も女の子をみて安心したようだった。女の子「おねーちゃんこれ。なんか変なおにーちゃんがジャッジメントの人に渡してくらつて」

と女の子が抱えている物を初春が受け取ろうとした時。妙な違和感が時人をよぎった。

時人「初春！！それを遠くへ投げろ！！」

初春「へっつ！？」

と女の子のもっている物がグニャツと歪んだ。初春はそれを払いのけると同時に女の子を抱えた。

御坂「くつつ。ならこれで……」

御坂がポケットからコインを取り出すがあせったのか取りこぼしてしまった。

時人「解放。身体強度最大限に……っこの近距離で耐えられるか？」

時人も能力を解放して初春たちの前に割り込んだがこの距離で耐えられるか分からなかった。そこへ当麻が割ってはいってきた……

爆音とともにフロア中が炎と煙に包まれた。ガラスが道路に飛び散り人々の悲鳴が響いた。

そんな中、少し離れた路地裏から一人の男がその様子をみていた。

男「ふふふ。騒いでる。騒いでる。思い知ったかジャッジメントめ！！」

御坂「それはどうでしょうね？」

男「なっなんだお前は？」

急に声をかけられてびっくりした男はとっさに退いた。

御坂「アンタが犯人ね？大人しく捕まりなさい。」

男「ふん。何をいつてるんだ？何を証拠にいつてるんだ？」

と御坂はポケットから携帯を取り出しボタンを押した。そこにはさっきの言葉が入っていた。男はギリッと齒軋りした。

男「っく。お、お前ら能力者に僕の何が分かるっていうんだよ！！能力があるってだけで威張りやがって。それにジャッジメントだっ

て建前だけで全くじゃないか。なにが学園都市の治安維持だ！！！」

と男が言い捨てると同時に御坂が男の顔面を殴った。男はその場に倒れこみ御坂を見上げた

さらに御坂は男の胸倉を掴み

御坂「歯ア食いしばれ、アンタみたいなやつが一番むかつくのよ。自分が一番かわいそうって思ってるやつがね。」

と御坂が拳を振り上げるとその拳を誰かが掴んだ。

時人「御坂。その辺でやめておきな。」

御坂「東城さん。……わかったわ」

そして御坂は戻っていった。時人はそのまま男を見下ろした。男は東城をにらみつけた。特にジャッジメントの腕章を。

男「ふん。建前だけの組織のくせに。守るべき民間人に大事件起こさせやがつつ。」

最後まで言い切る前に男は何か悪寒を感じた。

時人「……なあ。あまり余計なこと口にださないほうがいいぞ？ 犯罪者のお前にジャッジメントをとやかくいわれる筋合いはないからな。ここで消えるか？」

男「……………」

こうしてこの事件は解決した。が時人は後日買い物が中途半端だっ

た佐天に再び呼び出され買い物につき合わされおまけに食事を奢られるという事になったのだった。

第5話〜御見舞い〜（前書き）

お久しぶりです。仕事が激務だったため今更ですが更新します。

今回は初春さんが風邪を引いた回の後日談で風邪が佐天さんに移ってしまい主人公がお世話をするというよくありがちな展開のオリジナルです。

第5話　御見舞い

夏の暑い日が続く中時人は今佐天の下宿先の部屋の前にいた……。それはつい数時間前の出来事だった。

時人「え？佐天の看病をしにいつてほしい？」

初春「はい。実は先日の私の風邪が移ってしまったらしく、今度は私が看病しようとしたんですが、今度の会議に必要なデータを今日中に整理しないといけなくなってそれで東城先輩に変わりにいつてらいたいんですが……」

生憎と白井も御坂も今日は巡回と用事があるらしくどうやら代わりがないようだった。それならと時人は固法に聞いてみた。

時人「そんな感じなんですけど固法先輩。俺今日抜けちゃって大丈夫ですか？」

固法「ええ。大丈夫よ。この前のグラヴィトン事件も一応解決はしてるし、私も初春さんと事務所では会議の資料を整理してるから。何かあったら連絡入れるわよ。」

時人「了解です。なら行ってきますわ」

初春「ありがとうございます。佐天さんにはメール入れておくのをお願いします。」

時人「となると、飲み物とか消化に良いものでも買っていくか。」

そして固法と初春に簡単に仕事の引継ぎをし時人は佐天の下宿先へ向かった。

時人はインターホンを鳴らした。少し間をあけて佐天の声がした。普段の元気な声より幾分かテンションの下がった声で出てきた。

佐天「・・・あれ？どうして時人さんが？初春がくるって聞いてたんですけど・・・」

時人「ああ。ちょっと抜け出さない仕事でさ。俺が代役って事だわ。メールはいつてなかったか？」

佐天「あつ。充電するから電源落としてたんだつた・・・すいません・・・」

時人「まあそういうことだ。とりあえず上がって大丈夫か？」

佐天「あ。はい。今開けますね。」

ドアが開くとパジャマ姿の佐天が出てきた。熱が高いのか顔は上気しておりおデコには冷却シートを貼っていた。

パジャマも第二ボタンまで開けていて時人はいつかの記憶（第二話参照）が蘇り一瞬目をそらした。佐天もそれに気づきあわてて後ろを向いてボタンを閉じた。そして時人を部屋へ案内し、ベッドに横になった。

時人「具合はどう？見たところまだ熱はありそうだが。大丈夫か？」

佐天「・・・そうですね。熱・・・はさっきはかって38.5度でした・・・」

時人「結構シンドそうだな。っとスポーツドリンク買ってきたんだ。あと消化に良さそうなゼリーとかも、食欲はあるか？」

佐天「ありがとうございます。丁度喉乾いてたんですよ・・・いただきます。」

そして時人は買ってきたスポーツドリンクとゼリーをだし、佐天のおデコの冷却シートも変えてやったりした。ゼリーを食べて冷却シートを変えたおかげか少し楽になった感じのようで横になるとスウスウ寝息をたたててはじめた。時人は起こさないように気を配りながら持ってきていた宿題やら雑誌やらを読み始めた。それからしばらくして・・・

佐天「・・・時人さん」

時人「起きたのか？ 佐天。気分はどう？」

佐天「はい。だいぶ楽になりました。ありがとうございます。」

時人「そうか。でどうした？喉でもかいわたか？冷蔵庫にストックあるからとってくるか？」

佐天「いえ・・・ちよつと夢をみたんです。」

時人「どんな夢だった？」

佐天「能力が使えるようになった夢でした。それで初春達と一緒にジャッジメントやってみました。もちろん時人さんもいましたよ。なんかすごくいい夢だったな」

どこか遠くを見たような感じで佐天は言った。いくら良くなつてるとわいえまだまだいつもの佐天ではなく弱々しかった。時人は人間病気だとはやはり弱気になるものかと思った。でもあえてそこには触れずに

時人「そうか。佐天はどんな能力を使えたんだ？」

佐天「なんか風を操ってました。それで初春のスカートを捲ったり、犯人を浮かせたりしてました。」

時人「そうか。風力使いの能力か、佐天にはぴったりの能力だな。」

しかし佐天はどこか悲しそうに言った。

佐天「・・・でも夢なんです。目を覚ましたらやっぱり何の能力もないって実感しちゃって・・・」

そう佐天はレベル0。無能力者。白井も御坂も初春もレベルの違いはあれど能力が使える。そして検査ではレベル0の時人も特異体質という異能の力を持っている。が佐天には何もない。普通の女の子。

時人「・・・・・・・・」

時人は何も言えなかった。力を持っている自分がどんなに正論を言っても彼女には慰め程度にしかないから。自分がどういったって彼女の今の現実を変えられないのだから・・・・・・・・時人は自分への苛立ちで顔を顰めた。

佐天「どうして、時人さんがそんな顔してるんですか？・・・・・・・・大丈夫ですよ。分かってますから。自分の現実ってやつを・・・・・・・・私は無能力者だって事は・・・・・・・・時人さんは優しいですね。」

佐天はクスッと笑っていた。しかしいつもの彼女の明るい太陽のようない笑いではなく儚げに本当に儚げに笑っていた。

時人「・・・・・・・・佐天。」

時人は無意識に佐天の手を取り起こして抱きしめていた。自分でも何故こうしたのか分からないがそれでもこうせずにはいられなかった。佐天も一瞬びつくりしていたが抵抗はしなかった。

時人「・・・・・・・・今くらいは我慢しなくていい。言い出せないことあるんだろ？溜まっていたんだろ？今は全部吐き出していいよ。」

時人は佐天を抱きしめる力を少し強めながら言った。

時人「ごめん。今はこれしか・・・・・・・・受け止めることしか・・・・・・・・俺には出来ないから・・・・・・・・」

その言葉を聞いて佐天は体をビクッとさせた。そして次第に震える声から泣き声に変わり時人の背中に腕を回して時人の胸で泣き始め

た。

佐天「ヒック・・・ご・・・めんなさいっ・・・分かっていただけ・・・
分かっていただけ・・・でも・・・憧れは捨てられなくて・・・
ヒック・・・」

時人はそんな佐天の頭を撫でながらあやし続けた。そして暫くして泣きつかれたのか佐天はまた眠りに落ちていた。涙の後で顔は酷いことになってはいるが表情自体はどこか安心したようだった。後日佐天の風邪はすっかり良くなり、初春と共に支部の方へ顔を出した。いつもの元気でニコニコ笑って初春のスカートをまくってりして白井や固法、御坂とじゃれ合っていた。それをデスクで眺めていた時人に気づくと時人の方に寄ってきて

佐天「あの・・・ありがとうございます。色々と。その・・・
何か少し楽になりました。あっ、あの事は皆には内緒にしてくださいませんか？何か恥ずかしくて・・・」

とほのかに頬を染めながらお礼を言ってきた。時人はその時の佐天の顔にドキツとしつつ「あっああ。分かった。」とどもりながら応えた。

第6話〜幻想御手・前編〜（前書き）

昨日に続いて更新です今回は前・中・後篇の構成で行こうと思います。

でわ、どうぞ〜

第6話　幻想御手・前編

時人「幻想御手<レベルアップ>ですか？」

固法「ええ。今学園都市で噂になってるみたいなの。以前は都市伝説って扱いで噂程度にはなっていたけど、どうも実物が存在するらしいよ。」

と端末を叩きながら固法は時人に説明していた。今支部は固法と時人の二人だけだった。ついさっきまで白井もいたが巡回に行くために既に出ていつていた。時人は固法から資料をもらい目を通した。

時人「へえ」。手に入れると能力者はレベルが上がりレベル0でも能力を発現できるんですか。それはこの学園都市にいるなら誰でも喉から手が出るほど欲しがる物つすよね」

固法「ええ。でもそれは許されるわけにはいかないわ。能力はそんなに簡単にレベルが上がるものでもましてや身につくものでもない物よ。それをたやすく上げれるとしたら・・・」

時人「まず、間違いなく何らかの副作用がでるでしょうね。使用して直ぐなのか後々なのかは分かりませんが。危険なのは変わらないですね。」

そして固法と時人は険しい顔で腕組みをして唸った。そんな物が今都市内で出回ってるとしたら速く解決しなければいけない。能力の事になるとこの学園都市に住むものならば少なからず惹かれるはずだ。目の前の甘い幻想に。それは後々のその人たちの人生に関わる事だ。風紀委員として何としても止めなければいけない。

時人「俺も情報集めてみます。端末の情報も正確ではな場合もありますし。場合によってはそれっぽい奴らにも接触してみますよ。」

固法「そうね。でも無理はしないでね。もし本当に実在してるなら一筋縄じゃないかもしれないから。」

時人「了解です。」

とガチャと入口のドアが開きそこからいつもの四人娘が現れた。なんだか四人ともげんなりしていた。

固法「おかえり。どしたの？四人ともそんなげんなりした顔して。」

白井「あ．．あの女。あんな公の場所でいきなり脱ぎだしやがって一体どうゆうつもりですの。」

御坂「あ．．暫くあそこのファミレスいけないな．．．制服でバシてるし．．」

初春「アハハハ．．．ですね。」

佐天「私が飲み物こぼさなければ．．．．．」

とそれぞれ苦言を漏らしつつソファーに腰掛けた。時人は「何があったんだか？」と多少心配しつつ幻想御手の情報をまた調べ出した。と初春が時人の端末をのぞき込んでいた。

初春「あれ？東城先輩も興味あるんですか？都市伝説。」

時人「いや。これは調査の情報収集で調べてるんだ。何でも幻想御手っていうのが実在して今出回ってるんだとさ。」

初春「そうなんですか。なら私もお手伝いしますよ。」

白井「まあ。そんなもの実在してるなんて信じがたいですね。」

御坂「そうね。そう簡単にレベルが上がったら私達が普段やっていることが無駄になるわけだし。なんかムカツクわ。」

佐天「……………」

時人は佐天が何かいいたそうな顔をしているのに気づいた。とても難しい顔をして何か我慢しているようだった。

時人「どうかしたか？佐天。何か難しそうな顔してさ。」

佐天「え？い。いえ。何でもないです。それが合ったら私も能力者になれるのかなって。あははは。」

と慌てて佐天は弁解した。時人も「そうか」とその場は何も気に留めず聞き流した。そしてその日は解散し御坂と白井は常盤台の寮へ佐天と初春も同じく下宿先へ帰り。最後に固法と時人が事務所を閉め帰路についた。

時人「なんか今日の佐天は少し様子が変わったな。」

と電話でもして聞いてみようと思ったが、考えすぎかと思い時人は携帯をポケットにしまった。この時は誰も気づかなかった。佐天が幻想御手を入手しておりそれが彼女を危険な事に巻き込む事になると

は

第7話、幻想御手・中編、（前書き）

こんにちは、幻想御手の中編です。

第7話　幻想御手・中編

その日時人は幻想御手の情報集をかねて巡回をしていた。しかし、いくつかの情報はあれど決定的な証言になるえる情報は見つからなかった。手帳とにらめっこしながら学区内を歩いていた。

時人「むぐ。これといった情報はないか。分かったのは幻想御手はなんかのアイテムということだけか・・・」

そしてふと時人は先日の佐天の事が気になっていた。あの時彼女は明らかに何かを言いたそうな顔だった。しかしそれを必死で抑えているようにも見えた。あの時は特に何も感じなかったが今更だが気になっていた。携帯を取り出しアドレス帳から佐天の名前を表示させた。

時人「・・・・・・どうっすかね。俺の考えすぎでなければいいが・・・」

ピリリリ。と携帯の画面が変わり着信中の画面になった。表示は固法からだった。時人はすぐに反応し電話にでた。

固法「もしもし？時人君。今どこにいるの？」

時人「今セブンスミストの前にはいますが。何かありました？」

固法「ええ。今白井さんから連絡あつてなんか近くの廃ビルの当たりで幻想御手の取引を目撃したそうよ。」

時人「なんですって？本当ですか？犯人は？」

固法「結構苦戦してるらしいわ。あれから通信が切れてるから。時人君すぐに応援に向かってもらえる？座標は今送っておくわ。」

時人「了解です。でわいつてきます。」

固法「お願いね。あとその現場に佐天さんもいたらしいわ。」

時人はそれを聞いた瞬間驚いた。佐天が取引現場にいただって？が今はそれは後回しで白井の応援に向かう方を優先させた。

時人「とりあえず。現場むかいます。でわ。」

と通話終わり急いで現場へ走り出した。送られた座標を確認すると遠くもないが近くもない距離であった。脚力を強化しようと思ったがレベル4の白井が苦戦している相手だ。力は温存しておくべきと判断しそのまま走っていった。

ドゴゴゴッ。現場近くまで走っていた時人は凄まじい音を聞いた。見てみると現場の座標を記していた廃ビルが音を立てて倒壊していた。

時人「マジかよ！？　どんな奴と対峙してんだ白井のやつ。」

そして何回か曲がり角を曲がり目的の廃ビルへ到着した。が廃ビルは既に倒壊した後だった。そしてその近くに犯人と思わしき男をとっ捕まえている白井を見つけた。

時人「大丈夫か？白井。」

白井「あら。東城さん。ええ。このとうり多少手傷は負いましたが、犯人らしき男は捕まえましたわよ。」

と時人は男を見た。如何にもヤンキーと言すべき風貌の男だがその表情は恐怖に震えてた。時人はまさかと思い恐る恐る白井に聞いてみた。

時人「・・・白井。まさか廃ビル崩壊させたのお前か？」

白井「ええ。ビルの柱を窓ガラスで切断してやりましたの。少々厄介な能力だったものですから。」

と得意げに白井は説明した。「これは始末書もんだな」と心の中で時人は思いつつ、当初の目的を思い出したように言った。

時人「っと。それじゃあ。こいつに聞かないとな。幻想御手についてよ。」

白井「そうですね。さあ。洗いざらいしゃべって貰いますわよ？お兄さん」

男「はぐぎつつ。げ、幻想御手は曲なんだよ。」

そういつて男はポケットから音楽プレイヤーを取り出し差し出した。時人はそれを受け取るとボタンを操作したりしてみたが別段変わったところはなく、見た目は本当に只の音楽プレイヤーだった。

時人「で。これをどこで誰から手に入れた？」

男「俺らも色んなツテで手に入れたから元の入手先はわからないんだよ。受け取りもあつちから送り主無名で送られてきたんだしよ。」

どうやら嘘はいってはいないらしい。今まで時人の情報収集ではほとんど進展がなかったため現物を手に入れたことは大きな進歩だった。時人と白井は更に男に質問を使用した時だった……

男「ご苦労様です。ここからは我々アンチスキルが引き受けます。」

時人「アンチスキルか。」

白井「まだまだ。聞きたいことありましたのに……」

アンチスキル「よし。連れて行け。」

そして男はアンチスキルに連行されていった。その際白井は音楽プレイヤーを自分のバックに隠し入れていた。その後時人と白井は支部へ戻り固法と初春を交え幻想御手の現物を調べることにした。

固法「やっぱりどーみても只の音楽プレイヤーね。」

白井「そうですわね。曲を聴いても別段変化はありませんですしね。」

時人「そのようだな。しかし現にあの男は白井と渡り合えるまでに能力を使っていた訳だしな。なんかの手段でもあるのか？」

初春「これはもう少し調べてみたほうが良さそうですね。でもこれがあれば私の能力も……」

と初春は幻想御手を手に取り目をキラキラさせていた。と白井が初春の頭をペシッと小突いた。

白井「おやめなさいな。初春。そんなものでレベルが上がったとしても、嬉しくも何ともございませんことよ。ましてやそんなもの自分の力ではありませんのよ。」

初春「わっわかってますよ。ただ思っただけですよ。私だって風紀委員の端くれです。自分から犯罪には手を出しませんよ。」

言ってることは正論であるが手はしっかりと音楽プレイヤーを握り締めているため説得力は皆無だった。

と時人はふと思いついたように言った。

時人「そういえば白井。佐天はどうしたんだ？あの場にいたんだろ？」

白井「佐天さんですか？ええ。あの野蛮人共に絡まれていたので止めに入りましたが、その後は私もあの男とやりあってましたのでその間に避難でもされたのではないですかね？」

時人「そうか。なら問題なさそうだが……」

白井「どうしましたの？東城さん。あら佐天さんが心配でしたの？あらあらまあまあ。」

といきなり白井は顔をニヤニヤしながら時人を見ていた。なんか良くない想像……。もとい妄想でも含ませている顔に見えて時人は怪訝な顔をしていた。と初春が思い出したかのように声をあげた。

初春「そういえば、佐天さん電話にでてくれないんですよ。かけても着信拒否になってしまつてて。」

時人「なんだつて？メールとかは送つてないのか？」

初春「メールも送りましたけど、返事がないんですよ。」

と時人はおもむろに自分の携帯を取り出しアドレスから佐天の名前を表示し電話を掛けてみた。数コールの後にメッセージが流れた。

「「おかけになった番号は現在お客様の都合でおかけすることが出来ません。」」

時人「……俺の方も着信拒否さえてるか」

誰もが不信感を覚えた。時人はあの時佐天が何か言いたそうな顔をしたのを思い出し更に不信感を募らせた。そしておもむろに刀の入ったケースお持つと事務所の出口に向かった。

白井「どちらに行かれますの？」

時人「佐天の下宿先に行くてくる。これは絶対何かあるはずだ。俺だけでなく初春の番号も拒否にしてるってことは俺らに知られたくないことなんだろうし。」

初春「それつてまさか……」

固法「そうね。彼女が幻想御手を何らかの形で手に入れてたとしたら……」

と不意に固法の席の端末から着信の音が聞こえた。固法は端末をスピーカー設定にした。画面からはアンチスキルの職員の声がした。

アンチスキル「ジャツジメントの各支部に通達する先ほど拘束した幻想御手の所持者が取り調べ中に意識不明で病院に搬送された。さらに同様の症状の人も多数確認され全員幻想御手と見られる音楽プレイヤーを所持していたとのことだ。以上通達である。全員警戒せよ。」

白井「これは……」

固法「これが幻想御手の後遺症つてやつね。早く解決しないと犠牲者がふえるわよ。」

初春「はっ。佐天さん!!」

時人「そうだ。もし佐天も幻想御手を使っていたとしたら……俺は佐天のところに行ってくる。」

初春「私も行きます!!」

固法「分かったわ。私はここで待機して情報を逐一報告するわ。白井さんは街へ呼び掛け及び警戒と巡回をしてきてちょうだい。」

白井「わかりましたわ。」

そして時人と初春、白井の三人は事務所をで白井は街へ時人と初春は佐天の下宿先へ向かった。途中の道では既に別の風紀委員とアンチスキルの職員が呼びかけをしていたり倒れたりした人を運ぶため

緊急車両が数台行き来していた。

初春「佐天さん……佐天さん……」

時人「心配するな。大丈夫だ。きつとまだ大丈夫だ。」

初春は声が震えていたし時人も冷静を装っているがかなり焦っていた。その時初春の携帯が鳴りだした。二人は立ち止まり待受を見て驚いた。表示された名は「佐天 涙子」だったからだ。

初春「さ、佐天さん。今どこにいるんですか？電話しても拒否されてて、今大変な事に……」

佐天「……うん。知ってる。幻想御手使っちゃった人が倒れてるんでしょ？マコちゃんもアケミも倒れちゃったんだ……。私ももうすぐ倒れちゃうのかな？」

初春「大丈夫です。佐天さんは大丈夫ですよ。」

初春は佐天を必死に宥めていた。時人はそれを横でただ黙って聞いていた。

佐天「ごめんね。初春。能力も使えなくて迷惑かけてばっかです。」

初春「そんな事ないですよ。佐天さんはいつも私を引っ張ってくれたじゃないですか！！ジャッジメントに合格したときも一緒に喜んでくれましたし。能力なんてなくなつて佐天さんは私の友達ですから！！」

公衆の面前にも関わらず初春は大声で大粒の涙を流しながら堂々と

そういった。時人はそれを黙って見届けえた。

初春「たとえ倒れても絶対にお越しておきますよ。東城先輩だって白井さんだって御坂さんだっていますから……だから……だから大丈夫です。グスッグスッ。」

佐天「初春……ありがとう。ねえ、もしかしてそこに時人さんいる？」

初春「はい。東城先輩も佐天さんのことずっとごく心配せてますよ。今かわりますから……」

と初春は時人へ携帯を差し出した正直なにをいたったらいいか時人はわからなかった。それでも初春から携帯を受け取って耳に当てた。

佐天「……時人さん。ごめんなさい。」

時人「何故、謝るんだ？」

佐天「私。やっぱりダメでした。あの時時人さんに抱きしめてもらって少しは楽になったと思ったのに……なのに」

時人「気にするな。正直あの時の俺はかける言葉がなかったんだ。力を持っている俺が何を言っても無駄なんじゃないかと思ってた……でも」

佐天「……なんですか？」

時人「佐天は能力なんてなくなっても十分だ。明るくて元気で初春や

白井達と笑い合ってる姿が一番だ。能力に憧れるのだって別に悪いことじゃない。今回はやり方を間違っただけだ。」

佐天「時人さん。やっぱり時人さんは優しいです。いつも私の事助けてくれて・・・私なんかの為に・・・」

時人「そんな事はない。佐天だからだ。気づけば気にしてた。今回の事にしたってすごく心配になったんだ。だから・・・大丈夫だ。心配するな。またどうか遊びにいこうぜ。」

佐天「・・・ありがとうございます。それじゃあ。任せますね・・・」

バタつと音がして通話が途切れた。どうやら佐天も他の患者と同じように倒れたらしい。携帯を閉じて初春に返すと二人は頷き佐天の元へ向かった。そして部屋でお守りと携帯を握り締めて倒れている佐天と机の上の音楽プレイヤーを発見した。

第8話〜幻想御手・後編〜（前書き）

へんな前書きはほつといて後編です。
りそうです・・・

今回は前回より長文にな

第8話　幻想御手・後編

プープーと機械の音が病室に流れる。下宿先で倒れている佐天を見つけた時人と初春は救急車を呼び佐天を病院へ搬送した。その後支部にも連絡を入れたところだった。

佐天「・・・・・・・・・・・・・・・・」

初春「こうして見るとただ眠っているだけにしか見えませんよね。」

時人「そうだな。だが意識不明のようだな・・・・」

時人と初春は病室を後にして廊下に出た。廊下では次々と幻想御手の症状で運ばれてくる患者が行き交っていて看護師の人が慌ただしく動いていた。

初春「私。これから木山先生の所に行ってきます。脳科学を研究しているって言うてましたし、何か解決法を知ってるかもしれないんで。時人さんはどうしますか？」

時人「俺は一旦支部に戻るよ。電話では報告をしたけど固法先輩にもう一度報告してくる。何かあったら連絡頼むわ。」

初春「わかりました。じゃあ。行ってきます。」

そして初春は走っていった。木山先生とは先日初春たちが知り合った科学者で脳科学の研究をしているらしく助力をしてくれるらしい。後脱ぎ女？という都市伝説だという話もされた。すごい人なんだか

よく分からないう人だと時人はその時思った。

時人「……佐天。無事に意識戻るよな。」

ふと時人は佐天の病室を見て思い返していた。会ってからそんなに日はたっていないが佐天はとにかく明るかった。支部で初春や御坂達とジャレたり雑談したり、たまにコーヒー入れてくれたり、一緒にセブンスミストに買い物にも行った。事件には巻き込まれたが見舞いに行ったときにふと彼女の弱い部分を見た。しかし自分には何も出来なくてその時は自分に腹もたった。思えばあの時に何か出来ていればこんな事にはならなかったのでは？とも思っていた。

時人「……つとここで落ち込んでもしようがない。起きてしまったのならそれを解決するしかないじゃないか。よし。戻るか。」

両手でパシツツと頬を叩き時人は病院を後にし支部へと戻っていった。そして支部に戻ると固法、御坂、白井がいてなにやら端末の前にいた。どうした？と思い端末をのぞき込むとそこには木山先生の名前が出ており、そこには脳に干渉して人の脳信号をリンクさせてその人たちの能力の底上げをするという研究の論文も書いてあった。つまり幻想御手の発案者は木山先生だと言う事だった……

時人「これは……まじか？」

固法「ええ。さっき偶然似たような論文を書いてる人物を調べていたら木山 春生に行き着いたのよ……」

白井「思えば。おかしい事だとだけでした。妙に幻想御手について詳しいと思いましたわ。脳科学の研究をなさっているのとあくまでも仮定だの話でつい納得していましたわ。」

御坂「・・・・・・・・・・」

白井「更についさつきから木山先生との連絡も何故か取れなくなっ
てしまってますの・・・」

時人「なんだと？・・・しまった。初春が今木山先生の所に行つて
るぞ。」

固法「そうだったわ・・・しまった。時間的にもう着いてる頃だし
・・・」

白井「まずいですわね。初春はこの情報をまだ知らないですし・・・
」

御坂「ねえ。初春さんの携帯のGPSって感知出来ない？そしたら
場所の特定出来るんじゃない？」

固法「そうね。その手があったわ。」

と固法は早速端末を動かして作業を始めた。そしてしばらくして初
春の携帯のGPSを察知した。どうやら移動中のようなだった。そし
て向かう先へ先回りすることになった。そして事務所を出ようとす
ると御坂は白井に声をかけた。

御坂「黒子。アンタは残ってなさい。この前の怪我、完治してばな
いでしょ？」

白井「えっ？お姉様。知っていたんですか？・・・大丈夫ですわ。
この程度かすり傷ですわ。」

白井はそう言った。しかし不意を着いて御坂が白井の脇腹を触ると白井の身体は電気を帯びたようにビクつとなりその場に崩れ落ちた。

御坂「ほら見なさい。何処がかすり傷よ・・・」

白井「しかし。民間人のお姉様にこのような事危険なことに巻き込むの本来いけませんのに・・・」

と白井は食い下がるが、御坂は白井をそつと抱き締めた。

御坂「何言ってるの？アンタは私の可愛い後輩よ。少しは先輩を頼りなさいよ。」

白井「・・・・・・・・・・」

白井はそれで大人しくなった。固法と時人はそれを見てフツと笑った。そして白井は時人をギロツとものすごい形相で睨んだ。

白井「東城さん。くれぐつれもつ、お姉様に傷つけないようにしてくださいね？もしもかすり傷でもつけましたら、体内に異物でも入れてさしあげますから・・・よろしくて？」

時人「ア、アイサー。（木山先生より今の白井の方がヤバそうな気が・・・）」

白井「何か文句でもありませんか？」

時人「はあ。ないっすわ。謹んでお守りさせていただきますよ。」

白井「ならよろしくてよ。」

御坂「うしつ。じゃあ気を取り直して行くわよ!!」

時人「アイサー。んじゃ。行ってきますわ」

そして事務所にタクシーを呼び先回りポイントを支持し御坂と時人は現場へと向かった。運転手さんには風紀委員の権限を使えば無理やりに現場まで走ってもらうことにした。

御坂「そういえば、東城さんとは初めて一緒に行動するわね。」

時人「そうだな。御坂の隣にはほぼ白井が居るからな。まあ。改めて頼むわ。多分結構な戦闘になると思う。」

御坂「任せなさい。なんたってレベル5だから……。でも今回はちょっとそのレベルで佐天さんを傷つけちゃったかな……」

時人「……………」

御坂「木山先生とあった後に佐天さんと少し話をしてね……。その時に言っちゃったんだ。レベルなんて関係ないってさ。でも今思えば無神経な話だよねって思ってた……」

時人「俺も似たような物だ。何も言えなかった……。何かいっても結果佐天を傷つけることにしかないと勝手に思い込んでさ……」

御坂「……。でも だからこそ助けてい。何も出来なかったから。今度は全部知ってるから。佐天さんは私の友達だから。」

時人「そうだな。佐天だけじゃない。他の意識不明者の為にも木山先生を止めなきゃな。」

改めて決意したところタクシーは現場の近くに到着し運転手にお礼をいい降りた。既に戦闘は始まっているように見るとアンチスキルの車両と青いスポーツタイプの車との間で戦闘が起こっているようだ。御坂と時人は現場を見て驚いた。アンチスキルの車両は破壊され職員は倒れていた。そしてその先に人が立っていた……木山春生だ。

木山「……意外と対応が早かったな。さすがといったところか・
・」

御坂「初春さんはどこ？無事なんでしょうね？」

木山「ああ。車の中に拘束してるよ。何傷つけてはないから心配するな。全部終わったら解放するさ意識不明の患者も含めてな。元から誰も傷つけるつもりはないんだ。」

時人「そういう問題じゃないでしょうよ。既にここまで被害が出るんだ。今更そんな事言える訳じゃないでしょうが。」

御坂「一体なにが目的なの？これだけの事をして一体何がしたいのよ？」

木山「……説明してる時間がないんだ。結果がそれを証明してくれる。さあどいてくれないか？」

時人「残念だけど。それは出来ない事だね。・・・木山 春生。幻想御手事件の犯人として拘束させてもらう。」

木山「・・・・仕方ない。なら力ずくで行かせてもらう。」

と木山が構えると彼女の周りに風が取り巻きはじめた。そして右手で時人と御坂を指すとその風が二人へ襲いかかってきた。御坂は横に飛んで躲し、時人は刀を鞘から抜くと前方を斬り裂いた。すると風の刃はまるで斬られたように二つの割時人を通過していった。

木山「ほう。面白いものを持っているな。能力を斬る刀か。はじめて見た。」

木山はさほど驚いた様子もなく佇んでいた。そこへ御坂が電撃を放った。しかしそれは土の壁で塞がれた。

御坂「なっ？二重才能<デュアル>!!」

木山「ふん。そんな物より遥かに高度なものだよ。私のは多才才能<マルチスキル>だよ。」

そして木山は道路に手を当てた。すると道路が崩壊し下の方へ崩れ落ちはじめた。御坂は道路の機材にされてる鉄と自分の電撃で磁石の関係にして瓦礫から瓦礫に飛び移って着地した。時人は自身の身体の強度を上げどうにか着地した。木山は風的能力をつかいゆっくりと降りてきた。

木山「ふふ。レベル5といえど色んな能力を一変には相手出来ないだろ。その少年も面白い力を持っているがどうやら身体の強化だけで特に驚異ではなさそうだ。」

それを聞き、御坂は電撃を放ち、時人は脚力強化で一氣に間合いを詰めて懐に入ろうとしたがその前に電撃は土の壁によって防がれ、レポートで時人の攻撃も躲した。そして持っていた瓦礫を適当に投げつけた。その瓦礫が圧縮されたのを見た時人は刀で薙ぎ払ったが全ては薙ぎ払えず咄嗟に身体の硬化を上げ何とか耐えた。

御坂「東城さん！！！ 大丈夫？」

時人「な・・・何とかな。しかし、これは中々骨がいりそうだな・・・」

木山はまだまだ余裕といった感じで立っていた。そしてまた風の刃を作り更に炎と水の球を無数に投げつけてきた。多属性の連続攻撃に御坂と時人は防戦一方だった。御坂は周りの砂鉄で縦を作ったり電撃で消し飛ばしていた。時人は刀で切り裂いていたが如何せん数が多く脚力強化や硬化を強化して防いでいた。が限界だったようでガクつと膝をついた。

時人「つく。限界か・・・ごふつつ」

御坂「東城さん！！だいじょ・・・！！？左目が・・・」

御坂が時人へ駆け寄ると時人の左眼から血が流れていた。時人は気にしていないようだった。どうやら左目は使いものにならなくなっているようだ。

時人「何。心配いらないよ。これは力の後遺症だ。時間はかかるが時期回復するさ。この場を乗り切れ場だが・・・クソッどうやら体にもガタが来てるな・・・」

御坂「……どうにかアイツに直接取り付ければ直接電撃あびせられるのに……」

時人「あれだけの属性の能力を使ってるんだ。そうとう脳に負担がかかってるはずだしな。一発食らわせればどうにかなると思うが……」

木山「……そろそろ。終わらせようか。どうやら少年の方は限界のようだ。何、殺しはしないさ。しばらく入院してもらったくらいに程度にするだけだから……」

と木山がいうと二人の前に複数の瓦礫が現れた。それらが全て圧縮され始めた……

御坂「つく。グラヴィトンとテレポートの連携!？」

時人「っち。御坂。伏せて砂鉄で守りを固める……後は刀で薙ぎ払う。」

そう言つて時人は御坂を伏せさせ刀でできるだけの瓦礫を薙ぎ払つた……凄まじい爆炎が当たりに上がつてキノコ雲も上がったやがて爆炎もはれた……。そこには瓦礫に埋もれた御坂と時人の姿があつた。二人とも意識はないようだ……

木山「……終わつたな。これで邪魔する者はいない。」

木山はそれをつぶやき翻して歩き始めようとした瞬間だった……いきなり御坂が瓦礫から飛び出して木山の体に取り付いた。

御坂「・・・つつかまえて。」

木山「あの爆発の中で何故無事で・・・」

と木山は御坂がいた瓦礫を見て気づいた。瓦礫には違いないがそれはおそらく能力で作りに出された簡易的な防空壕の様なものだった。

木山「そうか・・・周りの瓦礫を磁力で集めて作ったのか・・・」

御坂「ええ。能力の応用ってヤツよ。でもそれだけじゃないわよ。東城さんが出来るだけあの爆弾を切り裂いてくれたからよ。それで何とか耐えられたのよ。」

木山と御坂は倒れている時人を見た。到底動けるような状態ではなかった。

御坂「さあ。喰らいなさい。直接の電撃よ！！！！」

木山「ギヤアアアアアアアアアア」

プスプスと煙が立ち上がり木山はその場に倒れた。終わった。御坂はそう思っで一息着こうとした瞬間だった。突如木山の体が起き上がった。咄嗟に身構えたが明らかに様子が変だった。木山の背後から何か出ているようだった。

木山「・・・つく。脳の処理が・・・制御デキ・・・ナイ・・・」

そして木山はまた倒れた。して背後から何かが飛び出した。ソレは徐々に姿を変えはじめ胎児のような姿になった。更になおも巨大化

していった……

御坂「ナン……なの？ コレ……」

と胎児は御坂に触手で攻撃してきた。御坂は咄嗟に回避し電撃を放った。直撃した。だが見る見るうちに再生していった。そしてしばらくにらみ合った後胎児は巨大化しながらその場を離れていった。

時人「……つく。気絶していたか……」

時人は目を覚ました。爆弾を薙ぎ払ったのまでは覚えているがその後の事はサッパリだった。相変わらず左目は見えず、身体もガタガタと軋んでいるが、動けるくらいには回復しているらしかった。と辺を見渡すとそこに立ちすくむ御坂と木山、更には無事だったのか初春もいて話をしていた。時人は痛む身体を引きずり三人の元へ向かった。三人は東城をみて安堵と驚きの顔をしていた。

御坂「あ。東城さん。もう動いて大丈夫なの？」

木山「驚いた……あれだけ至近距離で受けはずなのにな……」

初春「……でも大丈夫にも見えませんよ……」

時人「まあ。取り敢えず命に別状はない。……で状況はどうなってるんだ？」

時人は御坂達から状況を聞いた。木山からでた胎児の様な物は巨大化しながら移動してるとの事。その場所が原子力発電所ということ。そこで何か起こってしまえば学園都市は崩壊してしまうことだとい

う。それを止めるにはどうするかということだった。

時人「……………つまりはかなりヤバイ状況だったことなんだな。」

御坂「そうね。電撃受けても再生しちゃうし更にデカくなっちゃうし。打つ手ナシってとこね。何かアンチプログラムのものでもあれば……………なんてね。」

木山「……………それだ。」

初春「……………私持ってますよ。木山先生が渡してくれたアンチプログラム。」

御坂・時人「なんだって?!!」

そして初春はポケットからデータカードを取り出した。どうやらそれの中にアンチプログラムが入ってるようだ。

時人「それをどうやってあの胎児に聴かせるかだが?どうするかね?」

木山「何か大きなスピーカーでもあればいいのだが……………」

御坂「そうだ。原子力発電所の校内スピーカーのシステムをどこからハッキングして流せれば……………」

初春「……………それなら私がやります。アンチスキルの車両に生きている端末があればできると思います。いえ。やってみます。」

時人「決まりだな。なら後はそれまであの胎児を発電所に近づけさ

せなければいいんだな？」

つと時人は立ち上がり刀を捨てると胎児が向かった発電所の方向に歩きだした。御坂は慌てて止めに入った。

御坂「ちょ．．．ちょっと。それは私がやるから。東城さんは休んで．．．」

時人「出来ないな。それは。民間人ましてや女の子一人にそんな事させられるか。それにこれ以上御坂に傷つけたら俺、白井に殺されかねないからさ。」

御坂「．．．分かったわよ。どうなっても知らないからね。」

そして御坂と時人は走り出した。それを初春と木山は見守っていた。木山はクスッと笑い、

木山「．．．．．全く大した子達だよ．．．」

初春「はい！！ 本当にすごい先輩方ですよ。」

胎児は発電所のすぐそこまで来ていた。先に仕掛けたのは御坂だった。発電所の壁に磁力の力を利用して移動し胎児の前に立ちはだかり電撃を放った。そこへ時人が走り込み刀で退治の身体を切り裂いた。がすぐに胎児は再生した。更にさっきよりも巨大化しているようだった。

御坂「まったく。どこの怪獣映画だったのよ。」

時人「ゴ。ラもキング。ングもびっくりだな!!」

その後も攻撃を続けるが攻撃は喰らうが直ぐに再生し巨大になるの繰り返しだった。そして胎児の触手に御坂が捕まった。時人は触手を斬ろうとしたがそこで力の反動が来てガクッと崩れ落ちた。

時人「ちい・・・こんな時にかよ・・・動けよ。俺の身体、今動かないや全部終わっちゃうんだよ・・・」

しかし動かない。それもそのはずだ。長時間の使用。回復しきつていない身体での重ねがけとつくに限界は超えていてむしろ動けるのが奇跡なくらいだった・・・とその時何か耳に音が響いた・・・少しキンキンする音だった。御坂は触手を電撃で攻撃した・・・するとさっきまで再生していたのが再生しなくなっていた。

時人「アンチプログラム・・・初春・・・やったのか、御坂。今なら再生はしない。これで終わらせるぞ」

時人は最後の力を振り絞り刀を杖がわりにしながら立ち上がった。御坂も触手から逃れて地面に降りた。そしてポケットからコインを取り出し胎児に狙いを定めた。

御坂「これで。全部終わらせてやるわよ。」

すると胎児から声が聞こえた。よく聞いてみるとグラビトン事件の犯人の男や意識不明の患者の声、そして佐天の声も重なった声だった・・・御坂はその声を聞きながら立ち上がった。

胎児『誰だって能力者になりたかった……』

胎児は触手で攻撃するが砂鉄の刃で全て切り裂く。

御坂「……………ごめんね。気づいてあげられなくて……………」

胎児『しょうがないよね……………私には……………僕には……………何もなくて……………』

更に氷の礫で攻撃するが電撃で全て消し飛んだ。

御坂「うん……………頑張ったかったんだよね……………」

胎児『なんも力がない自分が嫌で……………でも憧れは捨てきれなくて……………』

後がなくなってきた残り触手で攻撃するが更に電撃で消し飛んだ。

御坂「なら……………もう一度頑張ってみよう……………そんなところでクヨクヨしないで……………自分に嘘つかないでさ……………」

御坂はコインを弾き……………放った。超電磁砲の名に相応しい一撃を……………

御坂「もう一度……………!」

凄まじい電撃で胎児の身体はボロボロに焼け出したそしてそこから核と思われる物質が表れた。

御坂「東城さん!! あれが核よ!!」

時人「……………了解。これで最後だ。俺の今の全部の力をこの一刀

に込める・・・」

そして時人は脚力を強化し飛び上がった。目標は目の前の物体のみ。刀の握り締め渾身の力で物体を切り裂いた。まっぶたつに割れた物体は跡形もなく粉々になりやがて当たりの風景と同化して消えていった・・・

第9話〜幻想御手・完〜（前書き）

当初は前・中・後編の構成でしたが、作者のまとめ能力が低いので
もう一本書きまゝです。胎児撃破後からはじまります。これで幻想御
手編完結です。

第9話　幻想御手・完

終わった。御坂の超電磁砲と時人の渾身の一太刀により胎児は完全に消し飛んだ。さすがの御坂も能力を使いすぎたのかその場に倒れ込んだ。時人に至っては当に限界を超えすぎている為か何時氣を失ってもおかしくない状態だった。そこへ初春が駆け寄って来た。

初春「御坂さん、東城先輩。大丈夫ですか？」

御坂「初春さん。うん。終わったよ。助かったわ。」

時人「お手柄だな・・・初春・・・せえぜえ・・・」

初春「あわわ、東城先輩・・・ボロボロすぎです・・・」

と初春は慌てて携帯を取り出し緊急車両の手配を要請した。すると遠くから車の音がし、一台のタクシーがこちらに向かって来た。そしてタクシーから白井が出てきて御坂を確認するとまず真っ先に時人へのしかかった。時人はゴフッと呻いた。

白井「・・・東城さん。覚悟はよろしいですか？遺言とかなら聞いてあげますわよ？」

時人「し、白井、スマン。マジで今重症過ぎて動けなさすぎるんだか・・・アバラも何本かイってるからどいてくれると助かるんだが・・・」

白井「お姉様にあんな傷をお付けになって何を言いますの？」

御坂「黒子、そのへんにしておきなさいよ。東城さんマジで重症だから。それに私をかばってこんなになったのよ」

白井「……しょうがないですわね。お姉様に免じて許して差し上げますわ。」

時人「……恩にきる……」

そして白井は東城からだいた。そうすると先程とは態度が変わり東城を支え起こした。そしてこれまた先ほどとは口調も変わり東城を気遣っていた。

白井「ご無事で良かったですわ。お二人とも、それと初春もよく解決してくださいましたわね。」

御坂「皆頑張った結果よ。当たり前じゃない。」

初春「はい。私もジャッジメントですから!!」

時人「……まあ。かなりやばかったけどな……これで終いだろっな。」

そして四人は顔を見合わせてクスッと笑いあった。瀕死の重症には違いないが満足感と達成感があった。これで患者も助かるだろう・

白井「そういえば、報告ですわよ。幻想御手使用者な患者も徐々に意識が戻り初めてますわよ。特にこれといった後遺症もないそうですわよ。」

それを聞いた初春と時人は先程よりも安堵の表情をした。そこへ一度初春の手配した緊急車両が到着し木山はアンチスキルに任せ四人は病院へ向かった。

医師「き、君。本当に大丈夫なのか？普通なら直ぐに集中治療室に入ってもらわないといけないほど重症のはずだよ。歩いてるのだからおかしいくらいなんだぞ！！」

時人「大丈夫ですつて。ここに来る途中の車で応急処置したし、その間に治癒力強化したからある程度は動けますから。」

病院に運ばれるなり医師たちが時人治療のために病室に運ぼうとしたが時人がこれを拒否したため医師達に押さえ込まれていた。どうやら時人には治療を受ける前にどうしてもやりたいことがあるそうだ。御坂達はそれを笑いながら見届け先に行ってるからと時人をほつといて行ってしまった。

時人「頼むよ。先生。アイツの・・・佐天の無事を確認したらちゃんと治療受けるからさ。それまで少し待ってくれよ。」

医師「佐天？もしかして幻想御手の被害者の一人だね。なんだ彼女の知り合いだったのか。なら仕方ないな。その代わり面会が終わったらちゃんと治療を受けるんだぞ。」

時人「解りました。ありがとうございます。」

時人は医師たちにお辞儀をし佐天の病室に向かった。だが病室には誰もおらず上の階から順位探そうと思った時人は屋上へ向かった。そして屋上のドアを開けるとそこには御坂と白井が入口にいて、屋

上の真ん中くらいで初春と佐天がなにやら話をしているところだった。佐天の無事な姿を見た時人はふうっと息をつき白井の隣の壁に寄り掛かった。

白井「あら。東城さん。お医者様たちは振り切ったのですね。」

時人「まあな。佐天の無事を確認したら、治療をうけるって約束だね・・・」

御坂「だらしないわね。もっと鍛えなさいよ。」

時人「鍛えたって無駄だってーの。こればかりはどうやったってな。」

と御坂と白井に愚痴られつつ佐天と初春を見守っていた。空には丁度夕日も始めていてあたりはオレンジ色に染まっていて何とも言えない景色だった。

初春「・・・佐天さん。」

佐天「ごめん。つまらないことで意地はって、初春たちを危険な目に合わせて傷つけちゃって・・・私、能力よりももっと大切な物を失うところだった・・・本当ごめんね。」

初春「そんな事・・・ないですよ。佐天さんは私の大事な友達ですから、これくら平気です。私だってジャッジメントですし。」

佐天「初春・・・そうだ。忘れてた」

と佐天はおもむろに初春のスカートを握り締め・・・そして壮大に

まくり上げた……

佐天「たっだいま。いや、これやらないと帰ってきた気がしないわ」

初春「さっささ佐天さん！！！！何するんですかつっ！！病み上がりのくせに。病み上がりのくせに」

そんなじゃれ合う二人を時人、御坂、白井は微笑ましく見守っていた。白井はふと御坂を見ると御坂は何か考えているようだった。

白井「お姉様？どうかしましたか？」

御坂「何でもないわよ……」

白井「今回の事件、彼らのせいだけじゃなく、それに気づいてあげられなかった私たち能力者の責任でもあるんじゃないのかな？」

白井は御坂の声を真似て問いかけてみた。凶星なのか御坂は顔を赤くしてそっぽを向いた。

御坂「ま、真似しないでよ……気持ち悪い……」

白井「お姉様らしい優しさですね。……優しさついでに気づいて欲しいこともありますわ……」

御坂「え？……何」

白井「私のお姉様に対する、あ・い・を・ですの」

御坂「ひいひい！！ 気持ち悪いわよ。くつつくな。黒子。」

御坂は白井の過剰すぎるスキンシップを全力で阻止していた。そして白井は御坂の電撃をくらい痛がっているのか気持ちよく感じてるのかよく分からない・・・果てしなく気持ち悪い顔をしていた。それを時人は眺めていた。するとこちらに気づいたのか佐天と初春が駆け寄って来た。そして佐天は時人の前に来て視線を合わせるようにしゃがみこんだ。

佐天「・・・時人さん。また・・・助けてもらいましたね。本当に何度も、何度も・・・」

時人「・・・無事で良かったよ。身体張った甲斐があったってもんだな。」

佐天の顔は笑ってはいたが瞳には涙を溜めていた。更にバックの夕日で照らし出されていた。不覚にもその顔を可愛いと思ってしまった時人は照れ隠しで顔を右側へ背けた。その時佐天は時人の眼帯で覆われた左目を見た。どうやらまだ視力はまだ戻っていないらしい。他の箇所も擦り傷や打撲などでまさにボロボロ状態だった。

佐天「本当に・・・こんなになるまで・・・私なんかの為に・・・」

時人「何いつてるんだ？ そうまでして助けたいと思ったからそうしたんだよ。能力とかそんなの関係ない。お前が「佐天 涙子」だから助けたんだ。助ける理由なんてそれだけで十分だろ？」

そして二カッと笑って佐天の頭を撫でた。その言葉を聞いた瞬間佐天は時人の胸に飛び込んだ。背中に手を回した。骨に響くかもし

れない。でもこうしたいと思って考えるよりも先に行動に出ていた。初春、白井、御坂は口をパクパクさせて微動だにせずにいた。当の抱きつかれている時人もかなりマヌケな顔をしていた。その顔をみて更に安心した佐天は時人の頬に小さく唇を当てて直ぐにはなした。

佐天「時人さん・・・本当にありがとうございます。」

時人「・・・・・・・・・・どーいたしました」

佐天の満面の笑と更にバツクの夕日とのコントラストに時人はかなりの衝撃を受け更にそれにより傷口が開きかけ・・・その場で気を失った。その後早急に集中治療室に入れられどうにか一命を取り留めたのはいいが暫く白井達に弄られる事になったのは言うまでもない。佐天は入院中毎日のように見舞いに来てくれ退院まで時人のお世話をしてくれた。白井たちにからかわれながら顔を赤くしながら・・・でも少し嬉しそうにしていたそう。時人はその顔にもドキッとしたのは言うまでもない。こうして幻想御手事件は無事？に解決迎えたのだった。

第10話　気づいた想い（前書き）

どうも、作者でございます。幻想御手の一見いらい佐天の事を気になってきた東城君のお話です。

第10話　気づいた想い

幻想御手事件から数日過ぎた。意識不明だった患者は順調に回復し
今では全員退院して元の生活に戻っていた。ただこの男を除いて・
・・

時人「・・・・・・・・・・・・・・・・」

当麻「おゝい。時人やゝい。おゝい。」

土御門「ん？上やんどしたんだにや？つと時やんどしたんだこれ
？」

青髪「んゝどしたんやろな。さつきからあらん方向ばかり向い
て、心ここにあらずやね」

当麻達三人の心配を余所に時人は考え事に没頭していた。あの日夕
暮れの病院の屋上で佐天が時人に行なった行為が時人の頭に焼き付
いていた。夕暮れで染まった佐天の顔に自分は確実に見とれていた。
その後も傷が完治するまで毎日のように見舞いに来てくれてその時
も若干照れたような顔でしかしどこか嬉しそうな顔で始終笑顔だっ
た。気づけば目は佐天を追っていて偶然目が合うと急に恥ずかしく
なって目をそらしてしまった・・・この気持ちはなんだろう？

青髪「・・・・・・・・それはきつと恋やね・・・」

時人「恋？」

当麻「おっ反応あったぞ。青髪ナイスだ。」

土御門「どうかしたにや？時やん。ぼーっとして」

時人「いやな。ちょっと知り合いの女の子の顔が頭から離れなくな。なんかこう・・・なんていえばいいのか分からん感じなんだわ」

時人はそんな事を口走った瞬間当麻、土御門、青髪の三人がものすごい勢いで教室の橋まで後ずさった。時人は？を浮かべながらうねっていたそして青髪は目をキラキラと輝かせ時人に詰め寄ってきた。
・・・いつの間にそこまで移動してきやがった青髪。

青髪「時やんそれは間違いなく恋やね。誰や？このクラスか？この学校の子か？」

時人「いや」 風紀委員の後輩の友達で冊川中学の子なんだが？」

土御門「中学生だと！！！！！！」

青髪「時やんいつからロリコンに？ちょっと詳しくきかせてな」

当麻「なんでお前ら二人が興奮してんだよ！？」

その後時人は土御門と青髪にあれやこれやと問い詰められ何故か当麻が吹寄にうるさいと怒鳴られ不幸だー！と叫びだし丁度小萌が教室に現れ時人の話を聞き土御門と青髪より更に問い詰められるというドタバタな時間を送ったのだった。

当麻「じゃあな。お勤め頑張れよ」

青髪「明日また聞かせてもらっさかいな。時やん」

土御門「そうだにや。とことん聞かせてもらっにや」

時人「ちよつと待て。俺は何一つ答えてねーよ。お前ら（主に青髪と土御門）が勝手に妄想繰り広げたただけだろーが」

といつもと変わらないやり取りをし三人と別れて時人は支部へ向かうとしたがあることに気づいた。携帯に表示されているスケジュールを見ると非番の文字が出ていた。今日一日中考え事をしていて非番ということすら忘れていたようだ。

時人「はあ。しょうがない。帰るか。明日は休日だが支部には行かないといけないし、別段行くともないし帰ってゆっくりするか。」

そして時人は帰路についた。帰宅時間ということと明日が休日ということと通りには人が溢れていた。ゲームセンターやカラオケに行こうかと相談する学生のグループ、夕食の買い物に行った帰りだろうか両手にビニール袋を持った親子連れ等で賑わっていた。時人はそんな人混みを掻き分けて帰路を進んでいた。すると人混みの中から自分と呼ぶ声が聞こえた。

佐天「おい。時人さん、おい」

声のする方を見ると時人と同じく制服の佐天が手を振って一生懸命にこちらを呼んでいた。時人はそれを見つけ佐天の元へと駆け寄った。合流すると少し通りの端により人混みから抜けた位置に移動し

た。

時人「よお。佐天も今帰りか？」

佐天「はい。あつ時人さんですか？」

時人「まあね。実は今日は非番だった忘れててさー。特に用事もなかったから家に帰ろうと思ってたところなんだわ。」

佐天「そうなんですか。・・そだ。なら今から付き合ってくれませんか？私も暇なんですよ。」

時人「ん。まいいか。特に用事はないからな。」

佐天「やった。ありがとうございます。」

佐天はとても喜びやったーと笑顔になった。時人は笑いながら見ていた。それから二人でどこに行くかを決めながら歩き始めた。時人は佐天に歩調を合わせながら隣を並んで歩いた。傍から見るとカッブルにも見えるような感じで。そして二人がたどり着いたのは地下街にあるゲームセンターだった。

佐天「時人さんはゲームとか得意ですか？」

時人「ん。並み程度にはやってるけど得意とか聞かれるとよくわからんわな。」

佐天「なら。これで勝負しましょうよ！」

と二人が最初を選んだのはパンチングマシンだった。筋肉ムキム

キのマツチヨの黒いおっさんがサンドバックを抱えていてサンドバックの真ん中にパンチを当ててそれで威力を測定するゲームのようだ。これならゲームの得意不得意に関係なく出来るからと佐天は言った。

佐天「ふふ〜ん。何を隠そう私はこれ得意なんですから。そこらへんの男子にだつて負けませんよ。」

時人「俺一応そこらへんの男子じゃねーか？。これといって筋肉質でも腕っ節も自信はないぞ？。体術もどちらかといったら防衛用だしさ〜」

佐天「まあまあ。取り敢えずやつて見てくださいよ〜。」

と佐天に急かされて時人はマツチヨおっさんの前にたつた。そして構える。佐天が「ストレス発散にもなりますよ〜」と横で言ったので「ふむ」と考えて

時人「青髪〜。土御門〜。俺はロリコンじゃねーぞ！〜！」

ドゴンツと音を立てておっさんとサンドバックが後ろへ倒れた。そして測定画面に数値が表示された。結果は・・・

時人「150か〜。佐天これ高いの？低いの？」

佐天「ん〜。平均より低いくらいですね〜。ちょっと意外です。」

時人「んなことないぞ〜。実は俺、握力とか筋力は通常の男子の平均値よりは低いんだわ〜。唯一脚力と持久力はかなり高かったけどさ〜」

時人に最初助けられたときは相手を簡単にぶっ飛ばしていただけない人並み以上はあるかと思つた佐天だったが意外な事を知り少し驚いていた。そして今度は時人と場所を入れ替わり佐天がおっさんの前にたつた。腕をぐるぐる回したり軽くステップしたりと、ボクサーの様な動作をしたあとおっさん目掛けて拳を放った。ドゴゴンツと時人の時人は明らかに違う音と共におっさんが吹っ飛ばされた。そして数値が計測された。

佐天「むゝ。180かゝ。残念。」

時人「すげゝ。俺よか遥かに上じゃないか。」

佐天「でも私最高190は出したことありますよ。今日は調子がイマイチだなゝ」

時人「さいですか……」

ゲームとはいえ中学生の女の子に筋力で差をつけられた時人は「鍛え直そう……」と心の片隅で思つた。その後ゲームセンタ内でいくつかのゲームをすることになった。格闘ゲームで対戦を試みたがほぼKO負けをし、UFOキャッチャーで佐天の欲しい物を取ろうとしたがどこかのギャルゲームの主人公の様に上手くいくはずもなく、500円も使つてようやくゲットした。それをあげると佐天は「ありがとうございます。」と嬉しそうに早速持っていたカバンのお守りと同じところにそれをつけた。そして佐天は時人を引っ張りプリクラの機械の中に入った。

時人「さ、佐天さんこれ……とるのか？俺が？」

佐天「そうですよ。ゲーセンきてプリクラ取らない女の子なんていませんよー!」

時人「いやいやいや。俺男の子なんだけど……って聞いてないや」

佐天のテンションに負けてプリクラを取ることになった。あまり写真を撮られるのが苦手な時人はどんな顔をすればいいのか分からず焦っている間に佐天が撮影開始ボタンを押したためカウントダウンが開始され時人は更に慌てたその時にバランスを崩し佐天を抱き寄せるような格好になりふと顔を画面の方にそらしたところまでタイムイングよく「パシャ」と音がした。

時人「……………」

佐天「……………」

出てきたプリクラを見て二人は恥ずかしくなりしばらくそのまま固まっていた。だが捨てるわけでもないでそれは持ち帰る事にした。外はもうすっかり暗くなっており、時人は佐天を下宿先まで送る事にした。その帰り道は二人とも無言だった。そうこうしてるうちに佐天の下宿先に着いた。

佐天「今日はありがとうございました。すごく楽しかったです。」

時人「ああ。俺も楽しかったよ。あまりああいふ場所には行ったことがなかったからさ。ありがとさね。まあハプニングもあったがね……」

佐天「そう……ですね……」

時人「なあ、佐天。俺さ。佐天と今日一緒に過ごして思ったことがあるんだ。というか多分随分前から思っていたことなのかもしれない。」

佐天「ん？ なんですか？」

時人「俺は・・・佐天の事が好きなのかもしれない。いや。好きだ。」

佐天「ッ！！？」

佐天は驚きを隠せず目を大きく開いたまま固まっていた。時人はそのまま続けた。

時人「最初の頃は明るくて、いつも本当に楽しそうな子だなとは思わなかった。でもあの日・・・見舞いに行った時に弱音を聞いたとき、ああ。この子を守ってやりたい。この子のそばにいたいと思っただ・・・」

佐天「・・・・・・・・」

時人「そして、あの病院の屋上の時の佐天の表情と・・・その・・・行為でさ。俺は完全に佐天を意識し始めたんだ。んで今日一緒にゲームセンターで遊んで完全に気づいたんだ。この気持ちにさ。俺は佐天の事が好きだって事にさ・・・」

自分の気持ちを全て言葉にした時人は改めて佐天を見た。先程の驚きの表情から一変して瞳にから涙を流しながら両手で必死に涙を拭いていた。時人はまず事をしたなと思ひ。

時人「ご、ごめん。一方的すぎだよな。もちろん。嫌なら嫌だといって構わない。俺は……」

と胸にトンと重みがかかった。見ると佐天が時人の胸に顔を埋めて泣いていた。背中の手を回しこれどもかというくらい強く抱きしめていた。その後かすれそうな声でしかしはつきりと言った。

佐天「私も……私もずっと好きでした……時人さん。」

今度は時人が驚く番だった。まさか佐天も自分を好きなんだとは思ってもいなかったからだ。

佐天「最初に助けてくれた時はいい人だなあ。とくらいだったけど、私もお見舞いに来てくれた日、抱き締めてくれたときになんだか安心出来て、ずっとこうしてもらいたいなって思い始めて……でも私みたいな能力もない子なんてきつと駄目なんだろうなって……」

時人「そんなことないさ。前にも言っただろ？俺はお前が「佐天 涙子」だから助けるんだってさ。あの言葉が全てだよ。」

佐天「時人さん……はい。……ありがとうございます」

ふと佐天が顔を上げて二人の視線がぶつかり見つめ合う形になった。佐天は自然と目を閉じていた。時人はゴクリと息を呑み、佐天に顔を近づける。あの日病院の屋上では佐天からで更に頬だった、今度は自らの意思で佐天の唇に自身の唇を重ねる。……数秒なのか数分なのか分からない時間の後二人は離れた。

佐天「あの・・・改めてよろしく願いしますね・・・」

時人「ああ。こちらこそ。中々一緒になれないこともあるかもしれないが・・・何かあたったら頼ってくれ。」

佐天「はい!!」

こうしてお互いの想いが通じた二人は改めて今度は「恋人」としての一步を踏み出したのだった。

第11話 特別講習（前書き）

ども 作者でございます。今回はアニメの補修回でございます。

感想や評価アドバイスなど随時受け付けてます。

第11話　特別講習

ある日の朝、朝食の支度をしていた時人に子萌から電話が入った。

時人「補修？ああ。ジャッジメント風紀委員で免除されてた分の埋め合わせ的な感じで？」

子萌「それもありますが、前回の幻想御手事件の被害者の子達レベルアップの為に補修なんで時人ちゃんに少し手伝いをしてもらいたんですよ。私と後黄泉川先生の手伝いということですよ。」

時人「ふーん。俺はいいけど。じゃあ。支部に電話して了承貰えるか聞いてから折り返しでもいいの？」

子萌「あつ。事務所の方には黄泉川先生がもう電話入れて許可頂いてるそうなので、多分少ししたら連絡いくと思うので大丈夫ですよ。」

時人「そうか。分かった。んじゃ。そのまま学校に行くわ。」

子萌「はい。よろしくお願いしますね。あと、出来れば私のお弁当作ってくれると、お母さん嬉しいかな？」

時人「もう少し速く連絡しろい。まあいいけど、オカズ大したものないから、余りもと簡単な物しかないんだけど・・・」

子萌「時人ちゃんの弁当なら、余りものでも問題ないです。」

時人「さいですか。りょーかい。じゃあ、学校で渡すさね」

子萌「はい。でわ、お願いしますね〜フン♪フン♪」

そうして小萌は鼻歌を唄いながら上機嫌で電話を切った。時人は「これ、どっちが保護者なんだろ・・・」と思いながら弁当の準備に取り掛かった。昨日は当麻やインデックス、土御門達が来ていたので大勢つつける様に肉じゃがと唐揚げとサラダを大量に作っていた。それがまだ余っていたのでそれに卵焼きとウィンナーを加えた弁当にした。そして制服に着替えて寮を出ようとしたときに固法から連絡が入り、今日は補修の手伝いをお願いという電話が入ったのでそれを了承した。

そして学校の校舎の入口に来たときに四人の少女を見かけた。四人とも冊川中の制服を着ており、その中に佐天の姿もあった。

アケミ「はーあ。補修か〜。やりたくないな〜」

ムーちゃん「このまま、バックレちゃおうか？」

マコちゃん「それはダメだよー。それこそ怒られちゃうよ。」

佐天「そうだよ・・・私たちは罰を受けなきゃならないんだよ・・・」

アケミ「涙子・・・じょーだんだよ・・・全く涙子は真面目だな〜」

時人「そうだな。やってしまった事に対してはそれ相応の償いをし

なければいけないわな。」

時人に声をかけられ四人は驚いて振り返った。時人は左手を軽く上げてよっという感じで挨拶した。

佐天「あれ？時人さん？どうしてこんなとこにいるんですか？」

時人「ん？ここ俺の学校だよー。ついでに俺も補修という名の手伝いさね。今日の特別講習の助手みたいなモンだ。」

アケミ「涙子。知り合い？ここの生徒ってことは、高校生ですか？」

佐天「うん。ジャッジメント風紀員で初春と同じ事務所の人だよ。事件のとき私たちを助けてくれた人……。あと私の彼氏……。かな。」

ムーちゃん「ええ〜！？涙子の男？まじで……。本当ですか？」

マコちゃん「へえ〜。どうも。涙子がお世話になってます。それから助けて貰いありがとうございました。」

驚く二人に対して、マコちゃんと呼ばれた女の子は礼儀正しくお辞儀えおして時人に御礼をいった。佐天の「彼氏」という言葉に少し恥ずかしさを感じたが。時人は三人に自己紹介をした。

時人「改めて。ジャッジメント風紀委員第一七七支部所属でここの高校の一年の東城 時人だ。よろしくね。まあ……。佐天とはそういう関係だわ。」

と時人が言っていると佐天を除く三人が目を輝かせものすごい勢いで時人に詰め寄ってきた。あまりの事に時人は目を丸くして驚いた。

アケミ「い．．いつから、なんですか？どこで知り合ったんですか？」

時人「え．．．．．っと、少し前の夜に不良に絡まれたのを助けたのが初めてで．．．その後家に泊めてそれから．．．」

ムーちゃん「泊めたんですか！？それから．．それから．．．」

時人「シャワーと服貸して飯食って遅かったから寝る事にしたんだけど．．．．．」

マコちゃん「そ、その時はどこまでいったんですか？布団は一緒ですか？」

時人「どこまでって？何がどこまでなんだ？」

と佐天が真っ赤になりながら叫んだ。

佐天「ツツツツ．．．．．三人ともやめて！！時人さんも真面目に答えないでくださいよ！！」

時人・アケミ・マコちゃん・ムーちゃん「ハイ！！すみませんでした！！」

佐天にガーンと言われ四人は慌てて何故か敬語で謝罪をするのであった。そうこうしてるうちに予鈴が鳴り時人以外の四人は講習会場へ時人は職員室へ向かった。時人が職員室に入ると奥の方で小萌が手招きしていた。時人はまず他の先生達に軽く挨拶をし小萌の机へ向かった。

小萌「急な呼び出しでごめんなさいです。時人ちゃん。」

時人「まあ。俺も少なからず関わっていたからな。被害者たちのその後の回復の確認が出来るって意味でも構わないさ。知り合いもいるみたいだし。」

小萌「そうですか。なら良かったです。なら早速お手伝いしてもらいましょうか。」

と時人は「その前にコレ」と鞆から包を取り出して小萌の机に置いた。どうやら今朝頼まれたお弁当のようだった。小萌はお弁当を嬉しそうに受け取った。

小萌「はあゝ。久しぶりに時人ちゃんの手作りですか。お昼が楽しみです。」

時人「ハイハイ。んで？この教材を運べばいいのかえ？」

小萌「あ。そうです。そうです。お願いしますね。私一人では持ちきれないんで。」

それもそのはず小萌の身長は小学生低学年と同じレベルである・・・・教卓には隠れるし、昔ジェットコースターに身長制限で乗れなかったという逸話も持っている。しかしそれなりに年齢は重ねておりお酒も喫煙もそこらへんの大人たちと変わらない感じでやっている。ある意味学園都市の七不思議でもあった・・・・本人に言う泣き始めそれを見たクラスの野郎どもが急に狂気と化すのを時人はいく度となく見てきていた・・・・主な被害者は当麻だが・・・

小萌「さあ。行きますよ。時人ちゃん」

時人「あいさ〜（言ったらどうなるかわかってるのに考えてしまうのはなんでだろう？）」

小萌と一緒に教室に入ると年齢様々に男女が座っていた。時人は誰もが見覚えがあった。幻想御手の被害者達……能力レベルアップに対してそれぞれが悩みを抱えそれに耐えることが出来ずに幻想御手あんなものに手を出した結果、昏睡状態という危険な状態に陥ってしまった。時人や初春や御坂の活躍で今は後遺症もなく日々の生活に戻っている……彼等の気持ちは分かる。だが償いは受けないといけない。どんな形であれ過ちを犯してしまったのだから……

時人「道を外せばその報いは必ず受けなければいけない……か」

時人は受講者にプリントを配る小萌を見ながら複雑な気持ちでそう考えていた。ふと佐天と目があったが佐天も同じく複雑な表情だった。分かっているつもりなのだろうが捨てきれない思いもあったのだろう……必死で割り切ろうとしているようだった……その後小萌の講義が開始されたが殆どの人がうわの空状態だった……

時人「それもそうだな……いくら授業で講義を受けても頑張っても勉強しても駄目だったから幻想御手レベルアップなんかに手をだしたんだから……」

約2時間位の講習が終わりお昼休みの時間になった。それぞれ各々で昼食を取り出した。時人はお湯を沸かす為食堂に降りてきていた。休日のため食堂の自販機は全て停止していたが湯沸かし器の方は機能をしていた。と自販機の前で佐天を見つけ声を掛けた。

時人「どした？佐天。自販機の前なんかで立ち尽くして。」

佐天「あ・・・時人さん。お弁当忘れて来ちゃって・・・自販機で買おうと思ったんですけど動いてなくて・・・」

時人「まあ今日は本来休みだからな。そだ。俺の弁当分けようか？」

佐天「いえ。悪いですよ。私が忘れたのが悪いんですから・・・」

とその時こちらを覗く視線を感じた時人が振り向くと独特な髪型をした女の子が覗いていた。時人は名簿をの記憶を只り彼女に該当する物を見つけた。彼女の名は重福^{じゅうふく} 省帆^{みほ}。レベル2の視覚^{ダミーチェック}阻害。相手の視覚を妨害して姿を隠す能力で確か「学園の園」で常盤台生を襲った犯人だったか。まあ彼女も幻想御手^{レベルアップ}の被害者だが。

佐天「あつ、重福さん。どしたの？」

重福「いえ。丁度通りかかった時に佐天さんがお弁当忘れたって言うていたのを聞いてしまったので・・・それで一緒にどうかと思つて・・・」

佐天「ありがとう。でも、実は時人さんがおべ・・・」

時人「なんだ、友達が分けてくれるんじゃないか。ほれ、佐天一緒にいつて来いよ。」

時人は佐天の口を塞いで口止めした。佐天は時人に口を抑えられモガモガしていたがやがて開放されハアハアと呼吸を整えた。そして

時人に促される形で重福と一緒に弁当を食べに食堂を後にした。時人は携帯を取り出しメールを送信した。もちろん佐天に向けて。

時人『あの子は佐天と話したかったんだろう。通りすがったって言ったけどずいぶん前から気配があつたし。何。俺の事は気にしないでいいさね。その子の話聞いたあげなよ。境遇者同士じゃないと話せないこともあるだろうしさ。……』

送信し終えた時人がお湯を沸かしそれを魔法瓶に入れ職員室に戻るうとした時に佐天から返事が返ってきた。

佐天『ありがとうございます。時人さんはやっぱりすごいです。また後で』

時人はそれを確認して再び職員室へ戻った。職員室の休憩室に入ると小萌と黄泉川が既にお昼を食べていて時人は沸かしたお湯で三人分のお茶を入れ、自分も弁当も広げた。こうして昼休みは過ぎていった。

黄泉川『さて。午後は体力テストじゃん。全員準備運動はいいじゃん。』

午後からは全員体操服に着替え校庭に集合していた。担当は黄泉川に変わり、時人もジャージに着替えて横で柔軟をして待機していた。全員が一通り準備が終わったのを確認して黄泉川は言った。

黄泉川『体力を図るには持久走が一番手っ取り早いじゃん。とにかく走って走って走りまくるじゃん。ペースがわからないのならまず

東城をペースメーカーでつけるからその後は各自のペースでいくじやん。でわ。スタート。」

全員一斉に走り出した。時人は全体を見渡し一番最後尾の男にペースを合せそれより前の連中は先に行かせた。そして幾分かの間時間が過ぎた頃天気が崩れ始めたのか雲行きが怪しくなりポツポツと雨が降り始めた。しかし黄泉川は中止をせず続行させていた。一人、一人と脱落していき今走っているのは最後尾の男と佐天の二人だけだった。時人は黄泉川の指示で佐天について走っていた。

佐天「はあ。はあ。はあ。・・・」

時人「頑張れ佐天。もう少し、もう少しだ。」

佐天「・・・はい。・・・はあ。・・・はあ。」

黄泉川「よし。東城。この子は私が着くから。お前はあっちの男の方についてくれ。」

時人「りょーかい。」

時人は佐天を黄泉川に任せ残りの男の方へついた。男はもうかろうじて走っている感じでかなり息も上がっていた。

時人「・・・頑張れ。・・・はあ。・・・はあ。あと半週でゴールだ。」

男「はあ・・・はあ・・・はあ・・・もう・・・無理です・・・」

時人「大丈夫だ・・・まだ足は動いてる・・・行けるさ・・・絶対

に」

時人は男を励ましながら付き添ったつとその時叫び声が聞こえた。ゴール付近で何かあったらしい。ゴール前で膝をつきそうな佐天の前でなんかヤンキーっぽい女子生徒が黄泉川に掴みかかっていた。

女子生徒「これ罰なんだろ？幻想^{アレ}御手を使ったアタシらに対しての罰なんだろ？だったらそう言えいいじゃないか？」

黄泉川「はあ？何いつてるじゃん？これは只の体力テストじゃん？言いがかりじゃん。」

女子生徒「シラを切ってるんじゃないよ。じゃあなんで こいつはもう限界だつていつてるのにもう一周走らそうとしてるんだよ？限界なら拳手しろつていつたのアンタだろ？」

女子生徒は佐天を指さしながら黄泉川にものすごい剣幕で食ってかかった。しかし黄泉川は全く動じず逆に女子生徒に言い放った。

黄泉川「限界？本当に限界だったのか？ならアイツを見るじゃん。アイツは一番に手を挙げたのに一番最後まで走ってるぞ？それにコイツだつて手を上げてから半週近くも走ったじゃん。」

女子生徒「それはアンタが強制的にやらせたんじゃないや・・・」

黄泉川「それが限界を超えるって事じゃないのか？もうだめだつて思ってから勝負じゃないのかじゃん？限界を超えるってのはそういう事じゃないのか？」

黄泉川の言葉を聞いてその場の全員が黙り込んだ。どうやらかなり

心に響いたようだった。時人も横の男を見ると先程とは違って変わって目に強い意思を感じ一步一步走りだした。時人はそれを見て少しペースを上げてみると男はそれにしっかரிついてきていた。そのままゴールまで走り抜け。その場に倒れ込んだ。

時人「……ふう。お疲れ様。最後はかなりいい感じだった。よく頑張ったさね。」

男「……はい。俺でもあんだだけ走れるんだって知りました……ありがとうございます。」「

時人「ははは。あんなもの幻想御手使わなくなつたってそれだけの力が貴方には有るって事です。自信を持っていと思いますよ。」「

そう言つて時人は男に手を伸ばし引つ張り起こして肩をかしたそして軽く拳でグータツチをした。それと同時に雨足が強くなったので全員校舎を避難をした。流石にあれだけ長時間走つたのか時人も疲労したようで肩で息をしながら廊下の壁によりつかかっていた。すると中から佐天の声が聞こえた。時人は入口から中を覗いた。さつき黄泉川に食つてかかっていた女子生徒と佐天が対峙していた。

佐天「逃げちゃ駄目です……これは当然の罰なんです……インチキしようとしていた結果なんです。当然の罰じゃ……ないんですか？」

女子生徒「……フン。お前、真面目だな……」

そう言つて女子生徒は鞆を肩に抱え教室を出ていった。その時時人とすれ違う瞬間にこういった。

女子生徒「世話になった・・・少し分かった気がする。自分のやったことの過ちが・・・」

時人「それが分かったただけでも、受けた甲斐あったら？」

女子生徒「・・・ふん。」

そう言つて女子生徒は行つてしまった。中では佐天が震えていてそれを三人が慰めていた・・・時人はそれをクスッと笑いながら見守つていた。そして最後の講習が始まった。担当は再び小萌に変わつていた。最初の講義とはうって変わつて全員が小萌の話を聞いている。最初。

小萌「確かに皆さんは幻想御手レベルアップに手を出してしまった。それは許されることではありません。当然罰はつけるでしょうけど、もう皆さんは受けてるはずですよ」

全員が？を浮かべた。小萌はフツと笑つて続けた。

小萌「昏睡状態になつたじゃないですか？アレが妥当な罰だと思いませんか？一歩間違えば二度と起きられなかつたかもしれないんです。これ以上の罰はないでしょう」

全員が納得したようだ。そう彼等は一度死にかけたんだ。確かにこれ以上の罰はないだろう。したがつて小萌の言葉が全員が罰を受け解放されたということの証明だった。

小萌「更に幻想御手レベルアップを使つたとはいえ、皆さんに発現した能力は皆さんの中に元から備わっている可能性です。ですから皆さんの頑張り次第で可能性は無限大に広がるんです。さあ目を閉じて思い出し

てください。能力が使えた時の事を……」

全員が目を閉じる。自分が能力を使えるようになった時の事。レベルが上がった時の事。嫌な事が多かったかもしれない。でもそれでも一時的にでも自分の自分だけの現実が……
バーソナルリアライティ―
全員が目を開けたとき小萌がいった。

小萌「皆さん自分だけの現実は見えましたか？それでは最後に能力
システム
スキャン
判定を行います。」

夕暮れの校舎の入口で佐天は階段に座っていた。アケミ、ムーちゃん、マコちんの三人とは途中で別れて靴箱に入っていた重福の手紙を読み終え、
システムスキャン
能力査定 of 診断書を見ていた。

佐天「……レベル0か……まあ、そんなに上手くいくわけないか……でもそんなに嫌な感じはしないかな……よし……」

佐天は立ち上がり天に右手を突き上げ決意を声に出した。

佐天・男「明日から頑張ろう」

佐天「あっ……」

男「ど……ども」

佐天は恥ずかしくなり階段に座り直した。男はそのまま行ってしまう

った。それと入れ替わりで時人が玄関から出てきた。

時人「ありゃ？佐天。もしかして待ってたんか？」

佐天「も〜。メールに後でって書いてたじゃないですか〜ちゃんと見ました〜？」

時人「そいや、書いてたわな。いや〜悪い悪い。」

佐天「む〜。」

佐天は顔を膨らませ拗ねたがしばらくしたあとフフフッと笑い出した。時人もそれにつられて笑った。と遠くから聞きなれた声で二人を呼ぶ声が聞こえてきた。

初春「佐天さ〜ん。東城せんぱ〜い。」

佐天「初春？こんなとこで何やってるの？それに白井さんに御坂さんまで・・・。」

白井「佐天さんショッピングですわよね？」

御坂「いやいや。屋上でやってるトークショーよね？」

初春「見ての通り。御坂さんと白井さんの意見が合わなくてさっきまで喫茶店でいました・・・それで佐天に決めてもらおうと思いついて・・・。」

時人「ははははっ。役目重大だな佐天。」

白井「あら。何を言ってますの？時人さんも道連れですわよ？」

時人「はい！？　んな女の子四人に野郎一人ってどんな組み合わせだよ」

帰る気満々だった時人に四人はジーツと視線を向ける。タラーっ
と汗を流しながらこういう時はあのセリフしかないよなと頭の中で
とあるツンツン頭の友人を思い浮かべながらそのセリフを発する。

時人「不幸だーーーー！！！」

オレンジに染まった夕焼け空が学園都市全体を染めていった。今日
も学園都市は平和な一日であった。

第12話 穏やかな日々（前書き）

今回は佐天さんとの絡みではなく当麻やクラスメイトにスポットをあてたお話です。まあ、東城君の学校生活です。

第12話　穏やかな日々

これはとある日の休み時間の何気ない言葉がすべての発端だった。

当麻、土御門、青髪、東城の四人は固まって話をしていた。内容は「萌とは何かについて」というくだらなさすぎる内容だった主に会話をしているのは青髪と土御門だが・・・。

青髪「やっぱ　はひゝとかほへゝとかの要素は必要条件だとボクは思っただけだな」

土御門「いやいや、ちっさくて、甲斐甲斐しく兄の世話をする健気さを持った妹こそ・・・」

当麻「おい。土御門。思いつきり舞華の事じゃねーか。妹をどんな対象で見てやがるんだよ。お前。」

青髪「上やんこそ、寮にちっこいシスターと同棲してるくせに人事の様にいえませんよ」

当麻「うるっせー。したくてしてんじゃねーよ。家計に大打撃与えやがってあの暴食聖職者めが・・・」

当麻はワナワナと拳を震わせてそのご諦めた様にはあゝとため息をついた。あらかたまた冷蔵庫の食料でも食い荒らされただろうなと時人は思った。

土御門「それに時やんだって少し前まで小萌先生の家に居候だっただろ？。こっちも中々侮れないぜよ。」

時人「そこで、俺に振るな。俺はいたって普通だ。お前らの趣向と一緒にするな」

青髪「ははゝん。普通の趣向の持ち主が中学生に手をだすのかいなゝ？時やゝん？」

時人「ぐっ．．．さ、佐天はカンケーないだろうが．．．」

土御門「逃げたな．．．」

当麻「ああ 逃げたな．．．」

青髪「まあ。上やんのフラグ建築に比べれば可愛ものやな」

当麻「はあ？何言ってたんだか。不幸なカミジョーさんには生まれてこの方そんな物立てた覚えはありませんが？」

当麻がそう言った瞬間教室の空気が変わった．．．野郎どもは当麻をものすごい怨念を込めたためで睨みつけ．．．女性人の中には何故か泣き出す子もいた．．．当麻一体その子に何をしたんだ？そして野郎どもは何故にブチギレ寸前なんだろうか？時人は口に出さないように心の片隅でそう思うことにした．．．

土御門「ほゝう？上やん．．．どの口がそんな事いうのかにやゝ？」

青髪「そやなゝ。上やゝん？」

額に青筋を浮かべ土御門と青髪が当麻に詰め寄る。その後ろには何故か周りの野郎ども集まっていた．．．

吹寄「コラ。男子。何を馬鹿騒ぎしてるんだ!!」

とそこへ学級委員の吹寄が一括した。そして野郎どもに囲まれていた当麻は吹寄に助けを求めた。

当麻「さっすが。委員長助かったわ。カミジヨーさんは感謝感げ・
・・・ごふおあああ・・・」

当麻は御礼を言おうとした瞬間吹寄が当麻へ強烈な頭突きを食らわせた。もちろんクリーンヒットし当麻は手で顎を抑え仰け反った。

吹寄「馬鹿いうな。私はあの子が何で泣いてるのか聞くためと罰を与えるために来んだ!!」

当麻「何をおっしゃいますか？カミジヨーさんには記憶にございません事ですよ・・・」

吹寄「じゃあ。なんでお前が叫んだ後に泣き始めたんだ？ったくこのもう一発食らわせてやる・・・」

吹寄の頭突きを既で躲したがその時にバランスを崩した。そしてこちらの様子を見ていた姫神を巻き込んで倒れこんだ。咄嗟に姫神が頭を打たないように左手を頭にあて右手は触れないような体勢をとったため支えきれずそのまま床にダイブした。

当麻「いつつう。スマン姫神・・・だいじょ・・・!!!!」

姫神「!!!!」

どという経緯でそうなったかはしれないが現状は当麻の左手が姫神

の女性にしかない山・・・つまりは胸に置かれていたしかも驚掴みしていた・・・

当麻「あの・・・姫神さん？・・・これは・・・その・・・えと・・・」

姫神「・・・殺す。」

当麻「ゴフツツ・・・」

姫神の肘打ちが当麻の頭にクリーンヒットした。当麻は頭を抱えその場でごろごろとのたうち回った。しかしはっと動きを止めたなぜなら・・・先程の野郎どもと更に吹寄を筆頭とした女性陣にも囲まれていた・・・

男子生徒「上条・・・毎度毎度やってくれて・・・覚悟はいいか？
ああ？」

当麻「あの・・・ちよつと・・・まつて・・・」

女子生徒「女の敵目め・・・今日こそは・・・」

当麻「ふっ・・・不幸だ~~~~~！！」

そう言つて当麻はものすごい勢いで起き上がり教室から逃げ出した。それを見た生徒たちもこれまた物凄い勢いで当麻を追いかけた。それもどこから持ち出したかは知らないが箒や金属バットやメリケンサック、果ては薙刀なんぞも持っているものもいた。

男子生徒「待てや~~~~！！！！上条！！！！」

女子生徒「今 息の根を止めてやるわ〜！」

当麻「俺が一体何したっていうんだよー！ー！？うわ。なんつうもの振り回してんだよ？！ここ学校だぞ？！話をきけ〜〜！！！」

そして時人は一人取り残された。そして散らかった机などをかたづけ始め終わると窓際の自分の席に戻り窓から外の様子を見た。すると当麻VS生徒たちの鬼ごっこはヒートアップしており能力まで使って当麻を追いかけていた。

時人「まあ。これが平和ってやつなんだよな・・・勉強して、遊んで、馬鹿やって・・・貴方達にも味わって欲しかったですよ・・・東城さん。時雨さん。」

第13話 少年の過去 (前書き)

今回はプロフでは色々誤魔化していた東城君の過去のお話です。

前回の最後の意味深な台詞の伏線もこれで解決します。

第13話 少年の過去

とある日の平日。時人はある場所を訪れていた……。そこは墓地だった。そして一つの区画で三つに並んだ墓石の前で手を合わせた……。

時人「元気だったかい？東城さん、時雨さん、先生。また来たよ。」

今日は彼等の命日だった。この日は時人は風紀委員も学校も休んでここへ足を運んでこうやってお参りをして過ごすのだった。これは6年前の丁度この日にある学区で起こった謎の集団による研究所襲撃事件とそこで唯一生き残った少年の話である……。

ここはとある学区内にある能力開発の研究施設である。ここでは置き去りの子供たち（チャイルドエラー）と呼ばれる子供たちを名目上は保護しているということになっているが、実際は研究者たちの能力開発の実験動物^{モルモット}として監禁されているに近い場所だった。その研究施設の一角のとある部屋で男性研究員と一人の少年が机に向かい合ってなにやらしていた。

大八木「さあ。トキト。このカードを透視してごらん。」

トキト「う~~~~ん。星？」

大八木「残念。答えは月だ。ならこれはどうかな？」

トキト「むっ。月かな？」

大八木「さんねっ。これが星だよ。むっ透視の能力は無し・・・と」

トキト「ごめん。先生。また上の人に怒られるでしょ？俺が何の能力も発現出来ないからさ・・・」

先生と呼ばれた研究社の名は大八木 勇^{おやま いさむ}。20代半ば位の男性で研究社らしく白衣に眼鏡といった風貌だった。そしてトキトと呼ばれた少年は10歳位のどこにでもいる少年だった・・・試験官の中で生まれた事を除いては・・・この研究所ではある能力について研究していてそこで身寄りのない子供達を引き取り能力開発をしてきたが進展がなかった為、ある高位の能力者の人物の精子と受精卵を用い、試験官で子供を誕生させ、生まれながらに高い能力の才能の遺伝を持つ子を人工的に誕生させて研究を進めようとしたのだった。そして生まれたのがこの少年トキトだった。

大八木「ははは。君が落ち込むことないんだよ。いくらいい遺伝子を受け継いだといってもそれは君個人とは全く関係ないよ。誰にだって向き不向きがあるからね・・・っといかん。いかん。こんなこと言ってるから上から言われるんだっただな・・・」

トキト「でも、俺は先生だから良かったよ。他の先生だったらもっと早くに用済みだって言われてるよ・・・」

大八木「そんなことはない。トキトは絶対スゴイ能力を持っているさ。絶対僕が見つけてやるんだ!!」

とその時部屋のドアが開いて一組みの男女が入ってきた。トキトよ

りは年上で17、18位の感じの二人組だった。男の方は寝癖の付いたボサボサの茶髪で活発そうな感だが、只目だけは綺麗な碧色をしていた。女の子の方は黒髪を後ろで一つ結び・・・所謂ポニーテイルにした髪型で凛とした感じだった更に左手には鞘も柄も鏢も真っ白な刀を持っていた。全く正反対の感じの風貌の二人組だった。

???「またはじまったよ。先生の熱血グセが」

???「ちよつと。聞こえてるわよ。もう少し声を抑えなさいよ」

トキト「あ。東城さん。時雨さん。お疲れ様です。」

大八木「ん？やあ。二人とも。いつ来たんだい？」

トキト・東城・時雨「また自分の世界に入っていやがったな（たのね）・・・」

男の方は東城、女の方を時雨しぐれといった。この二人はこの研究所でも屈指の能力者として研究員からも一目置かれる存在だった。東城の方は任意で身体能力の強化を行う能力。時雨の能力は能力自体を切断できるというかなり珍しい能力を持っていた。更に東城は体術を時雨は剣術がこれまた達人級の腕前でそのことも一目置かれる所以だった。因みにこの二人を担当したのも大八木であり二人にとつて大八木は先生であり、トキトは二人の弟分に当たる。その関係で四人はよく一緒にいることが多いのだった。

大八木「しかしいいのかい？一流クラスエリートの君たちがこんなとこまで来ちゃって。」

東城「ふん。あんなつまらないカリキュラムなんて受けてられっか。

他の連中もただ淡々と受けてるだけだしよ。面白くも何ともないぜ。」

時雨「貴方は真面目に受けてないってのもあるけどね。でも私もあの空気はあんまりいい感じはしないわ。まだ先生のところで受けてたほうが面白いし・・・。」

大八木「ったく。時雨君までそう思っちゃうわけ？僕の教えってそんなに違うのかい？」

時雨「褒めているんですよ。そんなに落ち込まないでください。それにトキトの様子も見に来るといふ口実もあるんです。」

東城「確かに。弟分の成果を見ないと兄貴は心配なんだよ」

と東城はトキトの頭をバシンバシンと叩いた。

トキト「いつ痛いですって、東城さん、やめてください。」

時雨「ほら、東城やめなさい。トキトがアンタみたいな頭になったらどうするのよ？」

東城「ちよつと待て。それは俺が頭悪いって言ってるみたいじゃないか？」

時雨「ええ。そのまんまの意味よ？ 当たり前じゃない。」

東城「時雨。この野郎。」

時雨「残念。私は野郎じゃなくて女よ。オ・ン・ナ。」

トキト・大八木「あははははははは」

たとえば実験動物として呼ばれようがこの人達と一緒に入れればこの生活も満更悪くないし何より楽しいしこの日々がずっと続くものだとトキトは思っていた。だが・・・それも長くは続かなかった・・・それは数日たった深夜に起こった。自室にて寝ていたトキトはけたたましい警報装置の音で目を覚ました。

トキト「う・・・ん。なっ何？何か起こったのかな？」

この音は侵入者や研究所に危険があったときに鳴るベルの音だった。以前避難訓練の時に鳴るベルだと研究員が言っていた。まずトキトは取り敢えず落ち着いて状況を把握しようとした時だった。扉が開き大八木、東城、時雨が入ってきた。

東城「トキト。生きてつか？」

時雨「トキト。ケガはない？」

大八木「大丈夫かい？トキト。」

トキト「あれ？。三人ともそんなに血相かいてどしたの？」

普段あまり動揺したりしない三人がかなり血相をかいていたのでトキトは目を丸くして「とりあえず、ケガはしてないけど」とだけ言った。三人はそれでホッとしたのか少し落ち着いた様だった。そして大八木が状況を説明しはじめた。

大八木「今この施設は何者かの襲撃を受けているんだ。ここはメイ
ン棟から外れているからまだ襲撃の音とかは聞こえていないけど・
・かなりの手練の集団の様なんだ。」

トキト「しゅ・・襲撃ですか？一体何のために？」

東城「さあな。まあ。大概この研究所が研究してる能力に関係して
るこつたろーよ」

時雨「そうね。有り得るとしたらそれくらいなものね。多分この棟
に来るのも時間の問題よ。速く逃げないと・・・」

どうやらここは襲撃を受けているようだ・・確かに耳を澄ませば銃
撃戦の音が聞こえてきた。本当に襲撃なんてものに会うなんてとトキ
トは思ったが何故かそれほど驚きも同様も不思議となかった。

東城「しかし、トキトお前意外と落ち着いてるのな？もつとこうビ
クつとしてるもんだとばかり思ってたぞ。」

時雨「そうね。私もそう思って心配になってたんだけど。取り越し
苦労だったみたいね。」

トキト「うん。先生がいついかなる時も冷静でいろっていったか
ら。んでも不思議なくらい冷静なんだ。なんでだろうね？」

大八木「ほほう。トキトの能力は感知系か情報分析系のかもしれん
な・・・うん。」

東城・時雨「先生！！」

大八木「ごつごめん。ごめん。分かってるよ。今は脱出が先つてことで……」

その時ドアの外から銃声が聞こえ数人が部屋に入ってきた。黒ずくめの防弾チョッキに顔を全て被ったマスクそして手には銃、腰にはナイフを装備したまさに武装集団の様な格好の奴らだった。その中の一人にトキトは物凄い威圧を感じた。そいつは他の奴らとは違い顔を隠しておらず、武装も銃ではなくトキトの身の丈くらいの巨大な剣を持っていた。

男「……くまなく探せ。そして殺せ。そいつとそいつに関わるすべての情報も人も……確かそいつは「トキト」というガキだ。」

手下「^{ラジャー}了解です。隊長。」

咄嗟にトキトの部屋の浴室に隠れていた四人は静かに機会を伺っていた。

トキト「狙いは……俺ですか？でもなんで俺なんですか？」

大八木「さあね？分からないけど。多分。ここで研究してるある能力が狙いだろっね。」

東城「はっ。冗談じゃねーよ。俺らの弟を渡してたまるかってーの。」

時雨「……そうね。ここは私と東城が敵陣を崩してその隙に先生とトキトを逃がすしかないようね……」

トキト「で・・・でも二人とも大丈夫なの？ 相手は銃とかもってるし・
・あのデッカイ剣持ってる人は・・・何か他の奴と違う気がする・
・・・」

東城「お？ トキトも気づいてたか。 流石俺の弟だ。 いい感もってるな。」

時雨「でもここは私達に任せて逃げるのよ？ 先生。 トキトを頼みます。」

大八木「わかった。 でも気をつけるんだぞ？ 相手も能力者の可能性もあるからね。」

東城「分かってるよ。 それに能力者相手なら俺と時雨のコンビは無敵だぜ」

トキト「・・・気をつけてね」

時雨「うん。 じゃあ。 行くわよ。 東城。」

東城「合点だ。」

そして東城と時雨は勢い良く浴室のドアを蹴り破り敵陣に突っ込んだ。 奇襲にあつた敵は銃を撃ち続けるが脚力を強化した東城は軽く躲し、時雨は刀で弾を弾いていた。 東城は相手の懐に入り込み鳩尾に膝蹴りを食らわし気絶させ、時雨は峰打ちでこれまた相手を次々と気絶させていった。 残ったのは大剣を持った男一人となった。

東城「へっ。 大したこと無いな。」

時雨「さて。あとはアナター人だけよ？」

男「……………ほう。少しはデキルようだな。だが……………」

とそう言った瞬間二人の視界から男の姿が消えた。東城は視力・聴覚・感覚を強化するが気配は全くなかった。……………だが次の瞬間・

トキト「ぐっはあああああ！！！」

東城・時雨「トキト！？」

トキトが叫んだ方に振り向くとなんとさっきの男が大八木を突き飛ばし、トキトの前に立っていた。そして持っていた大剣を振り下ろしトキトを切り裂いた。大剣と床にトキトの血が飛び散った。

東城「トキト！！こんのやろおおおおっ」

時雨「ダメ！！東城！！！」

時雨の制止を振り切って東城は男へ向かっていくだが男は東城の攻撃を難なく躲しそして大剣で貫いた……………

東城「ゴフツツ！！」

男「ふん。まだまだガキだな。戦場で熱くなったらそれで終わりだ。……………覚えておけ」

その時男へ刃の閃光がはしった。男は素早く東城から大剣を抜くとそのまま刃を受け止めた。

男「今のは中々いい攻撃だった。だが所詮は女の力だ。力では俺には勝てんわ!!」

時雨「ぐつつ!!」

鏑迫り合いから時雨の腹に膝蹴りを加え、よろけたスキに大剣を振り下ろす。時雨は刀で受け止めようとしたが力では敵うはずも無くそのままナメに斬られた。当たりに血が飛び散り時雨はその場に倒れ込んだ。トキトはそれを虫の息の状態で見っていた。

トキト（東城さん・時雨さん・・・クソ・・・また俺は二人に守られるのか?・・・何にも出来ずに・・・あの人たちを死なせてしまふのか?・・・クソ・・・クソ・・・クソ・・・何で俺には力がないんだよ・・・あの人を守る力が・・・欲しい・・・）

???（・・・しいか?・・・）

トキト（なんだ?声が聞こえる・・・誰だ・・・誰なんだ・・・）

???（・・・力が欲しいかと聞いている・・・）

トキト（・・・くれるのか?欲しいさ・・・あの人たちを守れるくらい力が・・・力が欲しい。）

???（ならばくれてやる・・・我が名は零^{ゼロ}全てを無に還す為に作られた存在・・・）

トキト（零・・・全てを無に還す・・・）

男は異変に気づいた．．．さつきまで虫の息で倒れていたトキトに妙な気配を感じトキトの方へ向いた。その時男は初めて驚きの表情をした。トキトが立ち上がっていたからだ。しかも様子が違う。髪は黒から白へと変わっており何より．．．トキトの身体から赤黒い何かが溢れていたからだ．．．

男「これは．．．まさか目覚めたというのか？あの力が．．．零^{ゼロ}の能力が．．．」

男はトキトの禍々しい気配を感じ戦闘体勢にはいるうとした．．．
・その瞬間だった．．．ザクツツと音がして男の右腕が吹き飛んだ．
・またも当たりに血が飛び散る．男はしばらくして自分の右腕がないことに気づき叫びをあげた

男「ぐおおおお？！！ き、キサマ一体何者だ．．．」

トキト「さつき、お前が言っただろう？ 零^{ゼロ}だよ．．．俺は．．．」

男「くつつ！！まさか目覚めるとは．．．」

トキト「さあ。始めるか。全てを零へ還してやろう．．．」

そしてトキトは恐ろしいほどの速さで男へ襲いかかった。男も銃で応戦するが至近距離だというのに全く当たらず簡単に懐にはいられそしてトキトの腕が男を貫いた．．．

男「ぐつつつ！ー！ま、まさかこれほどの力とは……だが只では終わらんぞ……」

トキト「？」

男はポケットからリモコンのような装置を取り出した。

男「こいつは……時限爆弾のスイッチだ……これを押せば……1時間もすれば……この研究所は跡形もなく……崩壊だ。作戦後の予定だったが……仕方ない……全員道連れだ……」

男はスイッチを押すとそのまま息絶えた……トキトそれをジッと見ていたが突然その場に膝をついた。髪の色も黒に戻り赤黒い禍々しい物も消えた。そして傷口からは大量の血が流れ出しトキトはその場で気を失った。……

東城「……ここは？」

大八木「東城君。気がついたかい？ここは医療室だよ。今君たちを手当するために運んで来んだ」

東城が辺をみると隣のベッドにトキトがそしてその奥のベッドには時雨が横たわっていた。三人ともかなりの重症だが何とか生きていた。

東城「先生。アイツはどうなったんだ？」

大八木「死んだよ。トキトがやったよ。」

時雨「ト……トキトがですって?!」

大八木「時雨君も起きたかい? ああ。なんだかトキトの身体に異変が起きて、それで瞬殺したよ。その後男が自爆装置をしてしまったね。後30分位でこの施設は崩壊するんだよ。」

東城・時雨「!?!」

大八木のいったとおり当たりでは爆発やら火災やらで本当に崩壊する手前まで来ているようだった。

東城「だったら、早くここから逃げなきゃ巻こまれるぞ……」

大八木「……………出来ないんだよ」

時雨「先生?」

大八木は苦しそうな顔をしてトキトを見た。

大八木「本当はお急手当をして、脱出するつもりだったんだけど、トキトは血を流しすぎて輸血をしないと病院までもたないんだ。でも丁度トキトの血液型の血がもうないんだよ……………」

東城「何だって……………じゃあトキトは助からないのかよ?……………クソウ!!!」

東城はベッドを殴った。折角このつまらない施設で出来た家族の様

な存在を守れないことに怒りが収まらなかった。そしてその時ベツドを殴った手から滲みでた血を見てあることを思いついた。

東城「なあ。先生。トキトって何型だっけ？」

大八木「ん？ああ。B型だよ。でもそのB型の血が今は……」

東城「あるよ。そのB型の血液。」

大八木「ん？どこに……ってまさか東城君……」

東城「ああ。確か俺の血液もB型だよな？」

大八木「つちよ。何を言ってるんだ。君だって重症のはずだ。そんなことしたら君は……それに出来たとしても足りないんだよ……まだ……」

それを聞いて東城はまたガクつと落ち込んだ。その時時雨が言った。

時雨「なら。私のも上げるわよ。……確か私もB型だから……」

大八木「なつつ……！？時雨君まで何を言っているんだ？」

時雨「でも……これでトキトは助かるんでしょ？それに……もう時間もないんでしょ？」

そうしている間にでも施設の崩壊が進んでいた。時雨のいう通り時間が無いのかもしれない……東城と時雨はトキトを一度見て再び大八木を見て言った。

東城・時雨「先生。俺（私）の弟を助けてやってください。お願いします。」

東城と時雨の真剣な眼差しについて大八木は折れた。そして急いで東城と時雨とトキトを装置に繋ぐと輸血の準備を始めた。その時時雨はトキトの胸の上に自分の持っていた刀を置いた。

時雨「私がずっと持っていた刀だよ。お守り程度には役にたつからさ。あげるよ。」

トキトの輸血が進む。崩壊まで残りわずかな中大八木は必死に端末を操作しながら治療を進めた。このまま自分の教え子を三人とも失うわけにはいかないと必死で端末を操作した。

トキトは暗闇の中にいた。真っ暗で何も見えず、また身体も動かせなかった。今度こそ本当に死ぬものだと思悟もしていた……。その時遠くから光が差し込んでそこから何かがトキトに近づいてきた。それは東城と時雨と大八木の三人だった。

トキト（なんだ……。光……。とても温かくて……。懐かしい……）

東城（トキト……。ごめんな……。守ってやれなくてよ……）

時雨（怖かったでしょう？……。本当ごめんね……）

大八木（僕も君たち三人を守れなかったよ．．．ははは．．．保護者失格だね）

トキト（東城さんも時雨さんも先生も悪くない．．．俺なんていつも守ってもらってばかりで．．．何も．．．出来なくて．．．）

東城（それでもいい。俺達は．．．お前に生きてもらいたい．．．だって俺達は．．．）

時雨（うん。だって私達は．．．）

大八木（そう。君達は三人とも僕が預かった大事な教え子だ。でもそれ以上に僕達は．．．）

東城・時雨・大八木（（ここで育った。家族だから．．．）

トキト（．．．くう、くうう．．．）

大八木（ははは。そうすると、僕がお父さんか。時雨君が一番上で、東城君は二番目の長男でトキトが末っ子次男か。おお、これは大変だな．．．）

東城（ちょ．．．俺は二番目かよ？俺が一番上じゃないのかよ？）

時雨（そんなわけないでしょ．．．むしろ貴方が末っ子じゃないの？）

東城（なっなんだと？）

トキト（あははは・・・）

いつもの光景だった。あの穏やかで暖かい日常の光景が目の前で起きていた。トキトはそれを見ていて思わず笑ってしまった。そして三人はトキトを振り返り笑顔で言った。

東城（トキト・・・お前は生きる。そしてこれからの世界を見てこい・・・俺達の変わりによ・・・）

トキト（え・・・？）

時雨（私達は・・・一緒には行けない・・・でも、貴方の中から一緒に見ているわ・・・）

トキト（そ・・・ん・・・な・・・）

大八木（大丈夫だよ。僕達はずっと君を見守っているから。だから・・・お別れだ。）

三人の姿が薄くなっていく・・・そして完全に消えてなくなった・・・そして暗闇だった視界がどんどん光に包まれていった・・・

トキト「・・・んん。ここは・・・俺は・・・生きているのか？」

トキトは手足が動くのか確認した。どうやら手足は動くようだ。しかし何か今までと身体感じが違った感じがした。そしてふと目の前に自分に覆いかぶさっているものを見て驚いた・・・大八木がト

キトを庇うようにして覆いかぶさっていたのだった。辺を見ると周りに広がるのは空だった。

トキト「先生。俺は一体どうしたんで……っは！！！」

大八木は死んでいた……。所々にガラスや建物の破片による傷や薬品も被ってしまったのだろう火傷の様なあとまであっても直視できるような状態ではなかった。そうまでしてもトキトを守ったのだ。そしてその両隣では東城と時雨もまた死んでいた。しかし三人ともどこか笑を浮かんでいるような顔だった。トキトは自分の両腕に管が通っていてそれが東城と時雨に繋がっているのを見て悟った。

トキト「……結局生かされたのか、俺……は……チクシヨウ……チクシヨウ……」

あの時暗闇の中で三人が言った意味はこれだったのかと結局自分は守られてばかりであの人達に何もできなかったんだと……。トキトは自分に腹がたった。力も何もない自分に怒りが込み上げてきて近くの机の廃材を叩いた。すると廃材と一緒に周りの瓦礫まで粉碎してしまった……

トキト「こんな腕力……。俺にはなかったはず……。しかも明らかに強すぎる……」

しかしトキトはこのような事が出来る人を知っていた……。そう東城だ。彼の能力は身体に関わるあらゆる物を強化できる物だ……。しかし何故彼的能力が自分に発現したのか、トキトは近く刺さっているガラスで自身の顔を見た。すると左目が碧く染まっていた……。これも東城の目の色だった。トキトは自分に何故管が刺さっていたのか理解した。そう東城がトキトに輸血で血を分けた事により東城

の能力がトキトに発言されたのだった。更に近くには白い刀が転がっていた・・・もちろんこれの持ち主も知っている人物だった。トキトは刀をギュツと抱き締めた。

トキト「東城さん・・・時雨さん・・・先生・・・ありがとう。俺、生きるよ。三人の分まで精一杯生きるよ・・・だから俺の中で見ていて・・・く・・・れ・・・よ・・・」

トキトはまた気を失った。そしてしばらくして消防車や救急車が到着をしたが、生き残ったのはトキトだけだった。トキトは急いで病院で搬送され集中治療室に運ばれ何とか一命を取り留めた。襲撃者が全員死亡していたためこの襲撃事件は多くの謎を残したまま一時解決ということになった。それからしばらくして・・・とある人物がトキトに面会に訪れた。

医師「トキト君。面会だよ。なんでも君の保護者の大八木って人の知り合いらしいよ。」

トキト「先生の知り合い？」

そして、ドアがあいて一人の女性？が入ってきた。女性というよりは限りなく幼女に近い姿だったが医師の先生は変わりに病室から出ていった。

トキト「あの・・・先生の隠し子ですか？・・・」

???「むつ。違います。これでも私は大八木さんより年上なんですよー!!」

トキト「なっなんですって!?!」

「???」つと自己紹介が遅れましたね。私は月詠つくよみ 小萌こもえです。貴方がトキト君ですか？」

トキト「はい。そうですが。先生の知り合いってきいたんですが・・」

小萌「はい。研修で何度か一緒にする機会があつてそれからの付き合いでしたよ。今回は残念な事になってしまいましたか・・・」

トキト「俺を・・・守ってくれたんです。最後の最後まで・・・」

小萌「よく。貴方達のお話を聞きましたよ。出来た姉とやんちゃな兄と控えめな弟の三姉弟みたいなのがいて毎日が楽しくってしょうがないって・・・」

トキト「はい。・・・本当に楽しくてしょうがない感じでした・・・」

小萌「トキト君。貴方はこれからどうされますか？」

トキト「・・・・・」

トキトはずつと考えていた。試験官から生まれた自分には身寄りなんていなかった。唯一の場所が彼処だったのだから、生きていくつて約束はしたもののどうすればいいのかは考えつかないでいた。と小萌が一つの提案をしてきた。

小萌「あの・・・良かったら私の処に来ませんか？」

トキト「・・・・・・・・え？」

小萌「大八木さんがそこまでして守った貴方が今後どう生きていくのか私も見てみたくなりました。それに知り合いの息子さんですから心配でなりませんですし。どうですか？」

トキト「・・・・・・・・いいんですか？俺、何もできないですよ・・苦勞かけるかもですよ・・」

小萌「ふっふん。任せなさいです。子供が大人に苦勞かけて何が悪いんですか？どーんと任せなさいです。」

トキトはこの小さな女性を見て少し大八木に似てるかもしれないと思った。生まれなんか気にせずに自分を見てくれるそんな所が・・・・・・・・

トキト「あの・・よろしくお願いします。・・・・・・・・小萌さん」

こうしてトキトは小萌に引き取られる事になったのだがその手続きの際にトキトの戸籍を取る為に名字と名前を取得しなければいけないらしく二人は考えた。

小萌「ん〜。名前はいいとして苗字はどうしますか？ 私の使っても構わないですけど・・・・・・・・」

トキト「・・・・・・・・あの・・一つあります。候補。」

そう言つてトキトは紙とペンを借りてこう記した。「東城 時人」と。

時人「東城さんと時雨さんの名前から貰いました。これでいいですか？」

小萌「はい。いい名前じゃないですか。じゃあ、これで提出しますね。」

そして提出も終わり退院に合わせてトキトは東城 時人としてこれからを歩んでいくことに決めた。退院の際医師から預かりものだと包を渡された。中には時雨の刀が入っており医師は「君がずっと握り締めていたものだ。形見だろうと思って私の方で預かっていたのだよ」と言っていた。時人はその白い刀に「時雨」と名を付け医師に礼をいい小萌と共に病院を後にしたのだった。一番頼りになる兄と姉の名と能力と形見を受け継ぎ、「東城 時人」としての新しい人生へと歩み出したのだ。そして六年の月日が流れ今に至る……

時人「じゃあ。またくるよ。今日は平日だったから学校も風紀委員も休んでしまったし。明日っから頑張っていくさね。じゃあ、また兄さん、姉さん、先生。」

そして時人はお墓にもう一度両手を合わせて墓地を後にしたのだった。学園都市は今日も平和な一日が過ぎていくのだった。

第14話 予兆 (前書き)

お久しぶりでございます。 今回はかなり更新が遅れましてすいませんでした。

第14話　予兆

とある日の休日。時人は今日も風紀委員の仕事で学園都市を奔走していた。案件はよくある事で「市街での無闇な能力を使った使用者を捕獲せよ」との事だった。既に犯人の目星はついており現在は捕獲作戦を展開中で犯人はもう追い詰められたも同然だった。そして路地裏で犯人を追い詰めた。

男「ハア・・・ハア・・・クソッ」

時人「観念しな。能力の乱用で拘束させてもらうさね。」

白井「まったく。まあー。飽きもせずにごう何件も起こる問題ですわね。」

右も左も壁であり、後ろの壁もとても登れそうも無い所で犯人は追い詰められていた。

男「くそつたれがああああ」

急に男は叫びだし時人と白井に襲いかかってきた。時人は白井の前に立ちほだかり、刀を構えた。その時だった頭の中に妙な声が響いた・・・

???（・・・・・・が・・・力が欲しいか・・・）

時人「なつつつ!?!」

その瞬間身体が自由が利かなくなり、構えた刀で向かってくる男に

容赦無く斬りかかろうとしていた。とつさに刀の軌道を無理やり男から逸した。刃はかろうじて男を通過したが、刃の風圧で周りの壁に無数の傷跡がついていた。そして微かに刃になにか黒いモノが纏っているかに見えたがすぐに消えていた。

白井「東城さん！？ なんですの今は！？」

時人「なっなに、問題ない。ほれ、ここ最近忙しかっただろ？ さすがに疲れがでて、力の加減ができなかったただけだ。」

白井「・・・そうですよ。気を引き締めませんと、いらない被害をだしますわよ？」

時人「ああ。スマン。気をつけるよ・・・」

そして時人と白井は気絶した男を拘束してアンチスキルへ引渡しをするために大通りの方へ向かった。しかし、時人は先程の自身の異変のことを気にしていた。

時人（なんだったんだ？ あの刃に一瞬見えた黒い渦のようなものは、しかも風圧であれだけの威力はだせなかったはずだ・・・それにあの声は一体・・・だが、俺はあの声に聞き覚えがある気がする・・・）

それからだった。時人の力が不安定になりはじめたのは、力を使おうとすると制御できずに建物を破壊したり、果てには犯人を病院送りにしそうな事もあった。最初は疲れなどの理由かと思ったが日に

日に悪化する状況を見かねた固法は時人なるべく現場ではなく事務所での書類整理等の雑用に回し、非番の日を増やすスケジュールを組むことにした。時人は納得は出来なかったが、現状が迷惑しかけていない事実がある為、従うしかなかった。

それから数日後の休日、非番で家でくつろいでいた時人は佐天に公園へ呼び出された。向かってみると佐天の他に御坂、白井、初春もいた。

時人「どしたよ？四人揃ってさ。」

佐天「私が呼んだんです。最近時人さん色々大変だからって聞いたんで・・・」

白井「単なる疲労だと思ってましたけど、どうもそれとは明らかに様子が違ったみたいでしたし・・・」

初春「それで、皆で相談してあることを思いついたんです。」

時人「あること？」

御坂「私達で東城さんと対戦方式で組み手をやって異変を調べようって事よ。」

時人「対戦方式だって！？やめてくれ。それこそ怪我人を増やすだけだぞ？」

時人は自分の暴走によって被害が出るのを恐れていた。実際に犯人を病院送りにしてしまい、事情聴取を遅らせてしまい警備員にも風

紀委員にも迷惑をかけていた。しかも力の暴走を抑える手立てが見つかるところか悪化さえしてる感じがしていた。今度は死人すら出してしまうんでわないかとも思っていた。

白井「何をおっしゃいますの？これも早く職場に復帰していただく為ですよ？人では多いほうがいいですから」

御坂「それに、実は東城さんと一変やって見たかったのよね」

初春「まあ。後は佐天さんがごく心配してたんで・・・」

佐天「ちよっ・・・なっ何言ってるの？初春」

時人「・・・・・・・・・・・・・・・・わかった。だが、もしもの時は逃げろよ。今の俺は暴走すると何するかわからないからな・・・」

白井「決まりですわね。でわ、早速はじめましょうか」

時人、白井、御坂はそれぞれ手足を鳴らして身体をほぐしたりせて準備をした。初春と佐天は近くのベンチに座り三人の様子を観察していた。

初春「大丈夫ですよ。佐天さん、きっと白井さんと御坂さんが何とかしてくれますから。そんな顔しないでください。」

佐天「初春・・・うん。だといいいけど・・・」

そして時人VS御坂・白井コンビの対戦方式の組み手が始まった。まず先手は白井が空間転移で時人の背後に移動し蹴りをいれる、しかし時人は身体をしゃがませ攻撃を避ける。そこへ御坂が電撃を放

つとここで時人は刀で電撃を斬り裂き、御坂へ突っ込む。御坂は電磁力で近くのパワーへ移動し距離をあげる。その時白井が鉄の棒を空間転移で時人の頭上に降らせてきた。鉄の棒は時人の両手足の服に刺さりその場にすっぴんになった。

白井「ふむ。いまいち反応が遅いですわね。」

御坂「やっぱり、力の制御が上手くできてないのかな……」

時人「……………」

白井「さて。ここからどういたしましょうかね。まだ暴走はしてはいないみたいですが……」

御坂「うーん。」

時人（やっぱり。ダメか……。力を抑えようとするとそこに集中がいつて反応が遅れる。だが、そうしないと、白井や御坂を傷つけかねない……。どうすれば……）

???（……そんなの決まってるだろ？壊しちまえばいいんだよ！！ 全部よ！！）

時人（……この声は……。あの時のか……）

不意に時人の身体がざわつく。それに気づいた御坂は白井へ叫んだ。

御坂「黒子！！。離れて！！」

白井「へっ！？」

次の瞬間白井へ時人の刃が襲いかかった。既で空間転移で躲したが、明らかにさっきまでの時人とは様子が違った。まるで別人のようにさえ見たのだ。白井と御坂はさっきとは違った意味で戦闘体勢にはいった。それを見ていた初春と佐天も異変に気づいていた。

佐天「なっ何あれ？時人さんなの？」

初春「私にもわかりませんよ。それになんか刀に黒いモノがまとわりついているように見えるんですが、あれは一体……」

そうしている間に時人は行動を開始した。刀を斜めに構えるとそのまま御坂に突撃した。御坂はさっきと同じように磁力を使って距離をとった。が時人はそのまま刀を斜めに振り上げるとそこから黒い刃状のモノがでて御坂に向かっていった。それを御坂は交すが、その通過したところの地面がえぐれさらに奥にあった林もチェーンソーなどで斬り倒されたようになっていた。

御坂「なっ？何なのあの斬撃は？」

時人「……………」

御坂が斬撃の破壊力に驚いている間に時人は驚くべき瞬発力で間合いを詰めてきた。そしてまたしても黒い何かを纏った刀を振りあげて御坂を攻撃しようとした。しかもの時人なら峰で攻撃するのだが今は迷うことなく刃側で襲いかかってきた。

御坂「つく……かわしきれない……」

白井「お姉様!!」

そこへ白井が時人の左側へ転移して脇腹に蹴りを入れる。時人は刀で蹴りをガードしたが横へ飛ばされ、近くの林に突っ込んだ。

御坂「ありがと。黒子。」

白井「いえ。しかし、あの破壊力にあの瞬発力。先程とはあまりにも違いすぎますわよ。」

御坂「うん。それにあれは東城さんじゃないわよ。明らかに私を殺しにかかってきてたわ。」

そして時人が吹っ飛ばされた林を睨みつけた。その様子を見ていた佐天と初春は啞然としていた。

初春「い、今のは一体……あれが先輩の暴走なんですかね……」

佐天「……………の……………じゃない……」

初春「佐天さん？」

佐天「あんなの……私達が……私が知ってる時人さんじゃない……」

佐天はベンチから走りだし、時人が突っ込んだ林へ走りだした。初春も慌てて佐天を追いかけていった。

御坂と白井は時人が出てくるのを身構えていた。そして林の中から時人が飛び出てきた。しかもかなりのスピードであつという間に二人との間合いを詰めて刀を振り上げていた。

御坂「なっ！！！！」

白井「しまっっ！！！！？」

そして刀を振り下ろそうと瞬間二人の時人の間に佐天が割り込んできた。

佐天「目を覚ましてください！！ 時人さん。力に飲まれちゃダメです！！」

が止まらない刃に佐天はギョツと目をつむる。が寸でのところで刃は止まっていた。刃に纏っていた黒いものはなくなっており、いつも通りだが苦しそうな表情の時人の顔が見えた。

佐天「時人……さん？」

時人「……すまん。やっぱり、こうなったか……つく……」

時人は刀を投げ捨て走りだした。結局何も解決策はでないばかりか白井や御坂拳句は佐天をも殺してしまおうとした自分が許せなくて、その場にいたくなくて公園から走りだしていた。佐天は時人の刀を拾い上げると彼が走りさった後を見ていた。

佐天「……時人さん……」

白井「これは、かなりの重症ですわね。まさかあれほどまでとは……」

御坂「うん。暴走もそうだけどそれ以上に東城さんの精神もかなり・

・・・」

初春「これから、そうすればいいんでしょうか？ 私達にできること
ってあるんでしょうか・・・」

佐天「時人さん・・・」

佐天は東城の刀を鞘にしまいギュッと握りしめた。そして三人は東
城が走り去った方向を見つめた。

第15話Aパート 葛藤・時人視点 (前書き)

どうも。作者であります。

いろんな方々にアドバイスを頂いたので書き方を変えてみました。やっぱり読みさんが読みやすい構成にしたいので絶賛試行錯誤中です。

第15話Aパート 葛藤・時人視点

いつ以来だろう……。自分の事がこんなにも疎ましく苛つ存在と
思ったのは……。あの事件以来、大切な物を失ったけれどかわり
に得るものだってあった。力を受け継がせてくれた。名前ももらっ
た。もうあんな事は起こさせない様に今度は自分が守るんだって
う信念だつてできたのに……。その為に風紀委員に志願して、訓練
に耐えているんな事ができるように努力してきた。実際その後その
成果だつて表れてきたという実感もあつた。そうあの日、任務で犯
人を追い詰めたときに聴こえた声を聴くまでは…………

????（…………力が欲しいか?…………力が欲しければくれてやる！
！）

その瞬間、俺の身体が俺から離れていく感じだった。俺の意志に反
して犯人の男を殺そうと刀を振るっていた。しかもその威力は今ま
で見たこともないほどの威力だった。明らかに殺意さえ籠った一刀
だった。その時は一瞬の暴走だと思つたが、日経つ事に悪化して
いき遂には一人病院送りにしてしまった。しかもかなりの重症との
事で未だに意識不明らしい。そしてさっきの公園での御坂と白井と
の戦闘方式の組み手ではつきりとした。……。俺の身体に何かが
おこっているということ、これ以上力を使えば確実に誰かを傷つけ
ることしかできないということを……。あの時はやくあの場を離れ
たくて逃げ出したんだっけか……

時人「クソ……。一体何がおこっているっていうんだ……」

????（教えてやろうか?…………宿主さんよ……）

時人「!!!？」

聴こえた。あの声だ。周りには誰もいない。となるとやはり俺の中から話しかけているようだ。そいつは俺の脳に直接話しかけてきた。

???（久しぶりだな。六年ぶりくらいか？）

時人（・・・やっぱり、お前は俺を知っているんだな・・・お前は誰だ!!）

???（なんだ。忘れちゃったのかよ？俺は零・・・零だ。）

時人（零・・・っは!! まさか六年前一度だけ聞こえた声のやつも同じようなことを・・・まさか）

零（ああ。そうだよ。あの時お前に声をかけ、襲撃してきた野郎をぶっ殺す為に力を貸した零だ）

時人（あれ以来。聴こえなかったのに・・・何故今更でできた。何が目的だ）

零（ふん。そんなの。お前の知ったことか。俺は只暴れたいだけだよ。それ以外の理由なんてあるわけがないだろーが）

暴れただけだだと？その為に俺の身体を乗っ取り力を使ってアレだけの被害をだしたのか？流石に声に出して叫んだ。

時人「ふっざけんな!! それだけの理由でお前は・・・」

零（ふん。お前みたいに軟弱で力の使い方もなっちゃいない奴に指

図されてたまるかよ。俺は好きなときに好きなだけ暴れさせてもらうからな。どういうわけか知らんがお前が力を使おうとすれば俺の方に意思決定権が偏るみたいだな。まあ せいぜい理性を保てるように頑張るんだな。」

時人「待て。零！！つく・・・」

確かにヤツの言う通り力を使おうとしたり強めたりするとヤツが出て来やすくなるのは事実だ。力を使わなければどうってことないが、それじゃあ守りたい人達を守れない。でも守るために力を使えばヤツがでてきて傷つける・・・どうしていいかわからない。

時人「クソ・・・どうすれば、どうすればいいんだ。東城さん、時雨さん、先生。・・・」

俺の葛藤とは反して学園都市の空は気持ちいいくらいの晴天だった・・・。

第15話Bパート〜何もできない私だけど・佐天視点〜（前書き）

時人君視点を書いたんで今度は佐天さん視点で

彼女の活躍？を刮目せよ（笑）

第15話Bパート／何もできない私だけど・佐天視点／

あの人が悩んでいるのを初めて見た気がする・・・思えばあの人・・・時人さんはいつだって周りに気をきかせてくれていたのかもしれない。私より年上で一番身近な男性で、優しく強い。私や初春、白井さんや御坂さんだって時人さんを頼りにしていた。でもその時人さんが今これ以上に無いくらいに悩んで、苦しんでいた。でも何も言ってくれなかった。私はそれがとても悲しかった。

御坂「東城さん・・・これからどうするんだろ？」

白井「そうですねー。今まであんな事なかったものですから・・・」

「

初春「東城先輩・・・」

佐天「・・・・・・・・・・」

三人も心配している。あの日の事は白井さんや初春に聞いて状況だけは把握しているつもりだった。でも時人さんからは特に連絡もなく、本人も疲れたと言っていた。でもそれからも状態は改善するばかりか悪化する一方だったという。そして一人を重体の病院送りにしてしまったと聞き、現場じゃなく事務所での雑務に回され、スケジュールの調整などとしたそうだった。それでもなんの相談もなかった。

佐天（確かに私じゃあ何も出来ないかもしれない・・・でも、それでも相談くらい・・・）

だから今日は時人さんが非番だと聞いたときに白井さんや初春、御坂さんと固法先輩にも相談して時人さんの異変の原因をどうにかしたいと思って時人さんを公園へ呼び出した。これで少しでも何か解決策が見つかればと思った、でもそれは間違いだった・・・アレはアレは時人さんじゃなかった。時人さんはあんな事絶対にやらない人だから・・・

御坂「それにしても、黒子、あの時の東城さん。どう思う？」

白井「ええ。明らかに普段の彼じゃないことは明白ですわね。あんなに好戦的ではないですし、戦い方も違いました。それに・・・あの黒い・・・気みたいなものは一体・・・」

初春「黒い・・・気・・・ですか？」

御坂「うん。なんか東城さんの刀になんか渦巻いててね。それでなんか斬撃みたいなのを飛ばしてきたのよ。その威力がまた異常だったんだけどね・・・」

白井「ですわね。・・・あの気は異常でしたわよ。完全にお姉様を殺す勢いでしたし、何より殺気がでまくっていましたから・・・」

佐天「あつ・・・時人さんの刀・・・」

私は時人さんの刀を拾った。始まる前に鞘だけ預かっていたからその鞘に刀を収めた。時人さんがいつも持っている刀。刀の事はよく分からないけどすごく大事な物だということが鞘から伝わってくる気がした。思わずギュツと刀を抱きしめた時だった。頭の中に直接声が聞こえた様な気がした。

???（あの子を・・・トキトをお願い。私の・・・私達の・・・大切な家族なの・・・だから・・・お願い。）

女の人の声だった。すごく透き通った綺麗な超えだった。でもすごく悲しそうな声だった。でもその声を聞いて私も決意をした。

佐天「私、時人さん探しに行ってきます。」

初春「佐天さん？どうしたんですか？いきなり。」

御坂「なら私達も・・・」

佐天「いえ。私に行かせてください。初春と白井さんは仕事の途中ですし、御坂さんもさっきの戦闘で疲れていますでしょうし、先に支部に戻っていてくれませんか？」

御坂「でも・・・手分けして探したほうが・・・」

白井「分かりました。ここは佐天さんにお任せして私達は支部に戻りましょう。お姉様。」

佐天「すみません。必ず連れていきますので・・・」

白井さんは私から何か感じとったのか御坂さんと初春を連れて先に支部へと向かっていった。去り際に「東城さんを頼みます。」と言ってくれた。私は「はい。」と返事をして公園を後にした。

佐天「今の私じゃないも出来ないかもしれない・・・でも・・・それでも、私は時人さんにはいつも通りの時人さんでいてもらいたい・・・
・今度は私が時人さんを助ける番なんだ」

私は時人さんを探して走りだした。勿論彼が持っている刀も抱えて。
今の私の気持ちを後押しするように学園都市の空は雲ひとつ無い青
空が広がっていた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1330r/>

とある科学と風紀の特異体質

2011年12月18日17時51分発行